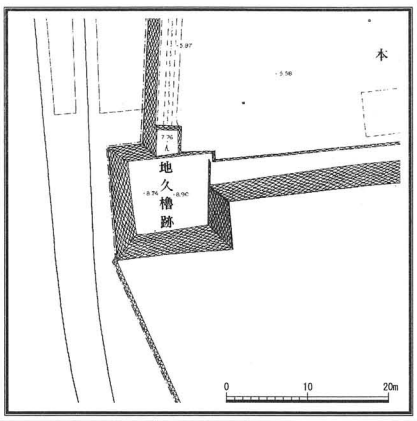
石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は本丸と天守台上をつなぐ石段である。 ・最上段での幅は約5.5mである。
積み方石材等	・踏み面、側面とも花崗岩の切石を用いた石段である。 ・側面はほぼ同規模の切石を用いた谷積である。 ・石段石材の裏面に「杉七」の墨書が見られる。 ・撤去時に側面の石材の裏面に分銅形・○の中に×の刻印が見られたことから、旧石垣石材を再加工したと考えられる。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態であったが撤去した。
石垣の変遷	・明治34・35年の玉藻廟建築に際し、築造された石段である。 ・平成18年12月に撤去した。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	1030	地区	本丸	石垣様式	積み方	野面	石垣位置
石垣部位	外（内堀に面する）				石積工法	乱積	
方　位	東				角石（算木）左	切石	
角の形状	左隅角	出			角石（算木）右	切石	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	地久櫓				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	無				刻　印	○、×、長方形、分銅形、ち、り	

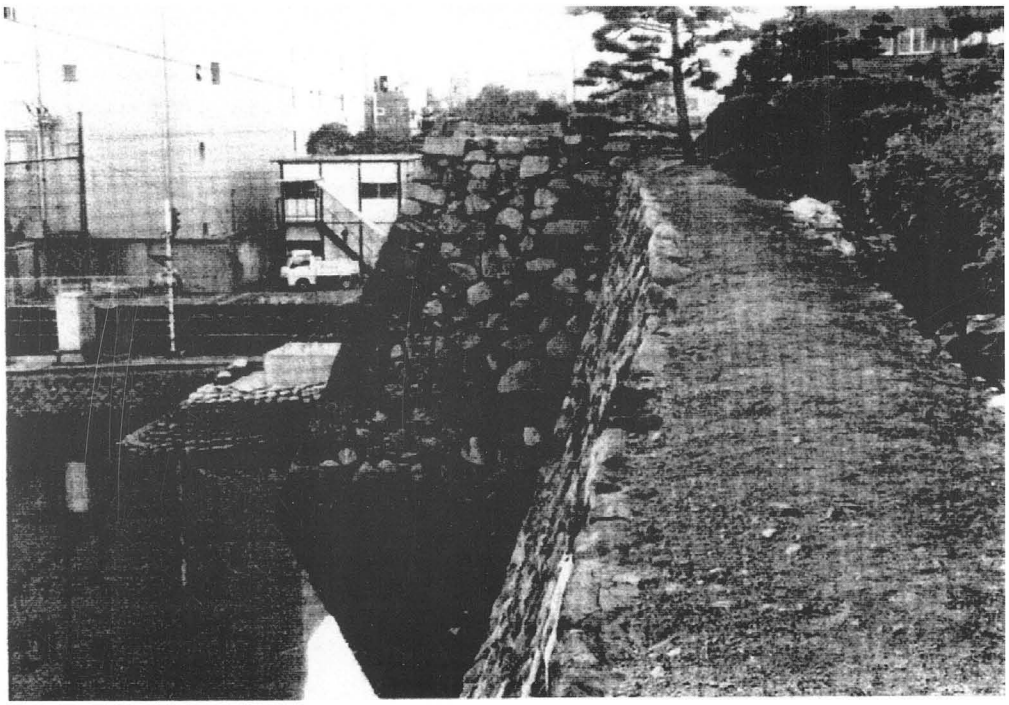


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
									s1			a3	b2	D

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
		9.08	5.96	8.75	8.65		70		77		

築造時期	生駒期・松平初期	改修	有	基底部	
修　理	解体中	文献資料			
発掘調査	『史跡高松城跡地久櫓台発掘調査概報（平成11～15年度）』	その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



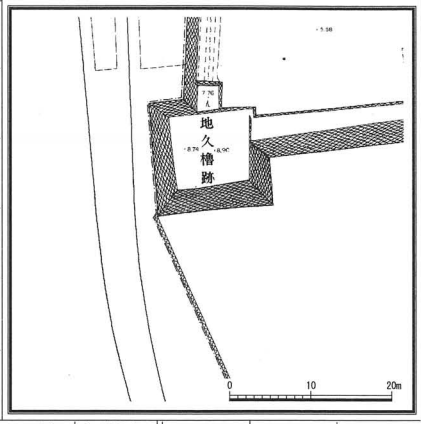
備　考		調査年月日	平成19年 3月30日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は本丸南東部の地久櫓台の東面石垣である。 ・高さは中央部で約8.6m、全長は天端で約9mである。 ・勾配は77度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石を用いた乱積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。 ・石材は方形で丸みのあるものが多く、規模はやや大ぶりのものが多い。 ・両隅角とも完成度の高い算木積である。 ・転用石は見られない。 ・刻印は左隅角2石目に○・×、4石目に分銅形、8石目に○・×、10石目に長方形・ち・り、11石目の右面に上、14石目に○・×、17石目右面に○の中に×が見られる。 ・目地は見られない。
破損状況	・間詰石のヌケは見られるが、概ね良好な状態である。
石垣の変遷	・発掘調査によると、生駒期に築造及び改修されたか又は松平初期に櫓台下部まで改修が及んでいると考えられる。 ・平成11年度から解体修理が行われている。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	1031	地区	本丸	石垣様式	積み方	野面	石垣位置
石垣部位	外（内堀に面する）				石積工法	乱積	
方　位	南				角石（算木）左	切石	
角の形状	左隅角	出			角石（算木）右	切石	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	地久櫓				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	無				刻　印	○、×、長方形、○の中に×、分銅形、	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
				s3								a1	b2	B

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	8.95	14.70	8.48	8.50	8.76	73				69

築造時期	生駒期・松平初期	改修	有	基底部	地山
修　理	解体中	文献資料			
発掘調査	『史跡高松城跡地久櫓台発掘調査概報（平成11～15年度）』	その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

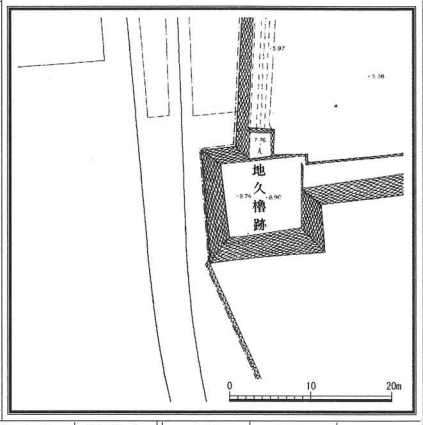
備　考		調査年月日	平成19年 3月30日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は本丸南東部の地久櫓台の南面石垣である。 ・高さは中央部で約8.5m、全長は天端で約8.9mである。 ・勾配は70度前後と緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の野面石を用いた乱積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。 ・石材は方形で丸みのあるものと角張ったもの等が混在する。規模はやや大ぶりのものが多い。 ・両隅角とも完成度の高い算木積である。 ・根石は上の石垣より半石分ほど外へ突出した状態で並べられ、基盤である砂礫の上に若干の栗石を下に敷いた状態で直接置かれている。 ・転用石は見られない。 ・刻印は左隅角6石目に上、10石目に○・×、4石目右側2石目に上、右隅角1石目に長方形、3石目に分銅形9石目に長方形、13石目に長方形、17石目に○の中に×、11石目裏面に上、17石目裏面に○の中に×、5石目左側2石目に上が見られる。
破損状況	・石垣中央部のハラミが著しい。
石垣の変遷	・発掘調査によると、生駒期に築造及び改修されたか又は松平初期に櫓台下部まで改修が及んでいると考えられる。 ・平成11年度から解体修理が行われている。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	1032	地区	本丸	石垣様式	積み方	野面	石垣位置
石垣部位	外（内堀に面する）				石積工法	乱積	
方　位	西				角石（算木）左	切石	
角の形状	左隅角	出			角石（算木）右	切石	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	地久櫓				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	無				刻　印	○の中に×、（、分銅形	

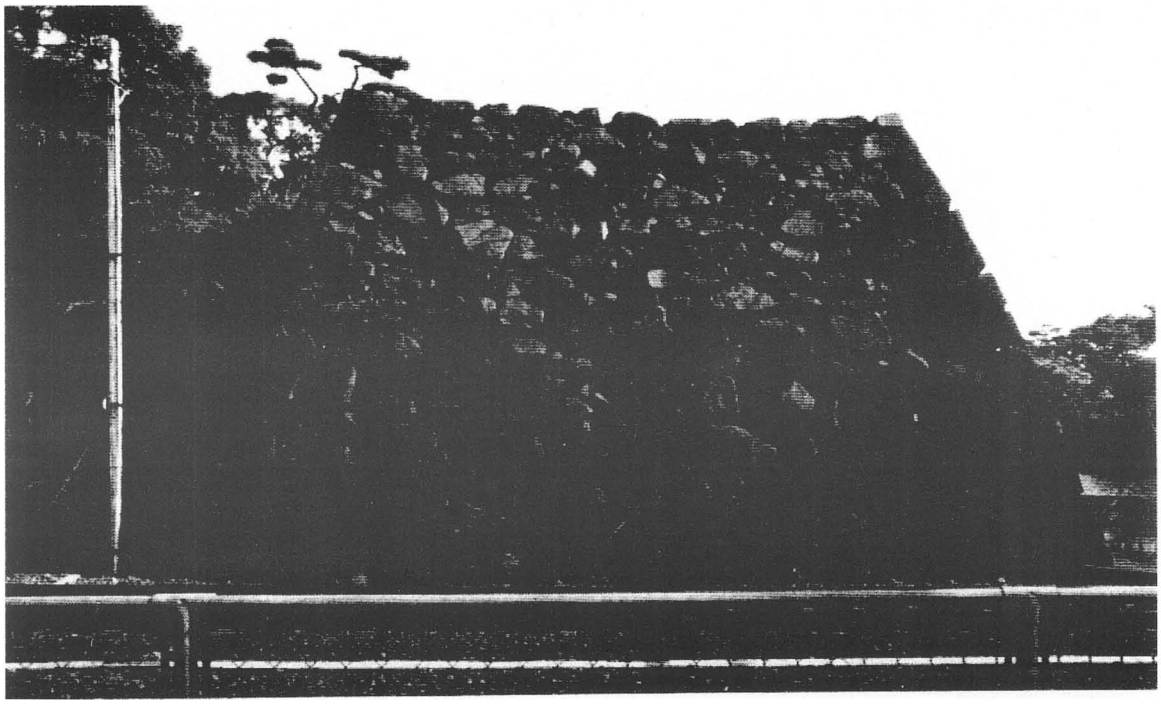


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
				s2	s23							a1	b1	A

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	9.08	13.72	7.65	7.48	7.64	74	－	－	－	74

築造時期	生駒期・松平初期	改修		基底部	
修　理	解体中	文献資料			
発掘調査	『史跡高松城跡地久櫓台発掘調査概報（平成11～15年度）』	その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



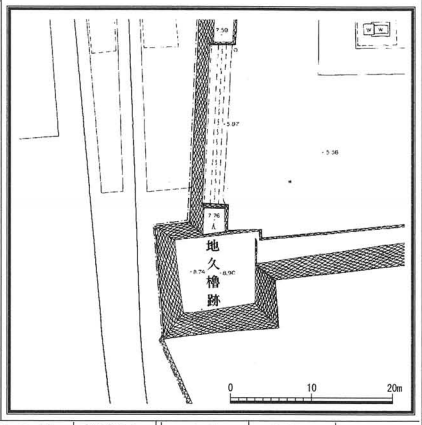
備　考		調査年月日	平成19年 3月30日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は本丸南東部の地久櫓台の西面石垣である。 ・高さは中央部で約7.5m、全長は天端で約7mである。 ・勾配は74度とやや緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石を用いた乱積である。両隅角とも花崗岩の切石を用いて積み上げられている。 ・石材は方形の角張ったものや角が取れて丸みのあるもの等が混在する。規模はやや大ぶりなものが多い。 ・両隅角とも完成度の高い算木積である。 ・転用石は見られない。 ・刻印は左隅角2石目に○の中に×、4石目裏面に上、5石目裏面に上、6石目裏面に上、右隅角5石目に（、7石目に○の中に×が見られる。 ・目地は見られない。
破損状況	・石垣の中央部のハラミが著しい。
石垣の変遷	・発掘調査によると、生駒期に築造及び改修されたか又は松平初期に櫓台下部まで改修が及んでいると考えられる。 ・平成11年度から解体修理が行われている。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	1033	地区	本丸	石垣様式	積み方	野面	石垣位置
石垣部位	その他（後世のもの）				石積工法	乱積	
方　位	北				角石（算木）左	切石	
角の形状	左隅角	出			角石（算木）右	切石	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	－				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印		無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b1	D

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
		2.61	3.54	2.2	1.96	2.04	73				

築造時期	明治以降	改修		基底部	
修　理	解体中	文献資料			
発掘調査	『史跡高松城跡地久櫓台発掘調査概報（平成11～15年度）』	その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

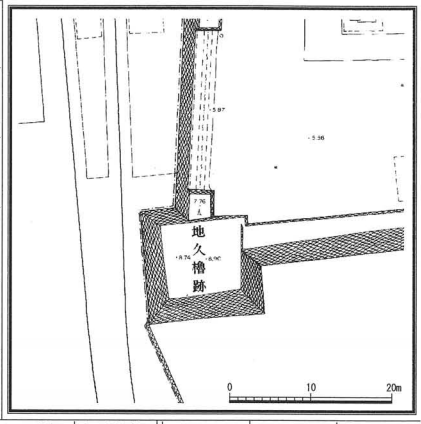
備　考		調査年月日	平成19年 3月30日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は本丸南東部の地久櫓台の北側に付属する小石垣の北面石垣である。 ・高さは中央部で約2m、全長は天端で約2.6mである。 ・勾配は73度と緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石を用いた乱積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。 ・石材は方形で、規模は大ぶりなものが多い。 ・両隅角とも完成度の低い算木積である。 ・左隅角の最下位の石は約1/3ほど突出している。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・絵図には描かれておらず、明治以降の石垣である。 ・平成11年度から解体修理が行われている。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	1034	地区	本丸	石垣様式	積み方	野面	石垣位置
石垣部位	内（多聞櫓台）				石積工法	乱積	
方　位	東				角石（算木） 左		
角の形状	左隅角	入			角石（算木） 右	切石	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	多聞櫓				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印		無	

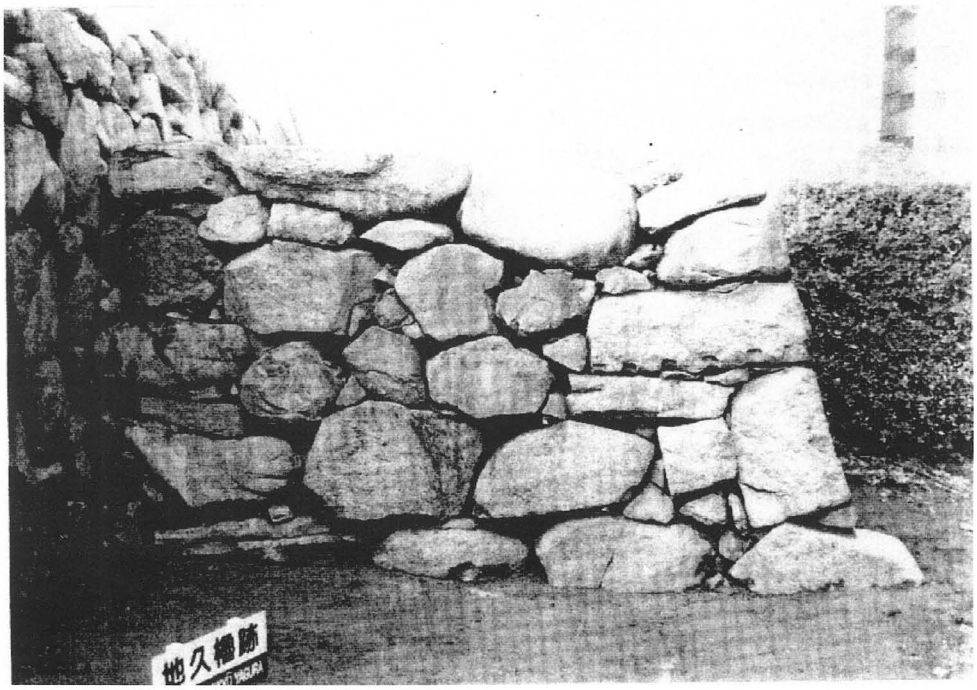


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	2.94	4.18	2.15	2.08	2.17		80			77

築造時期	明治以降	改修		基底部	
修　理	解体中	文献資料			
発掘調査	『史跡高松城跡地久櫓台発掘調査概報（平成11～15年度）』	その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



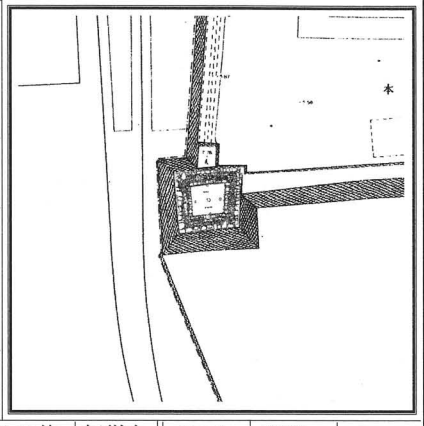
備　考		調査年月日	平成19年 3月30日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は本丸南東部の地久櫓台の北側に付属する小石垣の東面石垣である。 ・高さは中央部で約2m、全長は天端で約2.9mである。 ・勾配は77度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石を用いた乱積である。右隅角は切石を用いて積み上げられている。左隅角は入隅である。 ・石材は方形で角張ったものが多く、規模はやや大ぶりなものが多い。 ・左隅角は完成度の低い算木積である。 ・転用石は見られない。 ・刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・明治以降の積み直しの可能性がある。 ・平成11年度から解体修理が行われている。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	1035	地区	本丸	石垣様式	積み方	野面	石垣位置
石垣部位	穴蔵				石積工法	乱積	
方　位	南				角石（算木）左		
角の形状	左隅角	入			角石（算木）右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	地久櫓				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	無				刻　印	無	

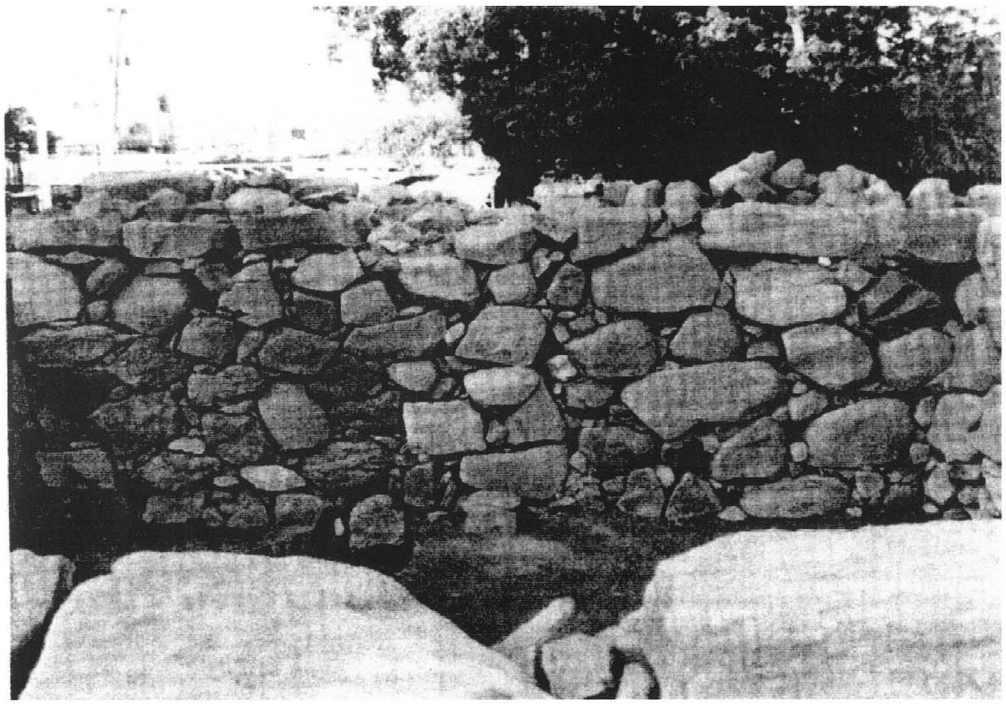


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b3	D

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
		5.24	4.64	2.08	1.84	1.92		80		85	

築造時期	松平初期	改修	基底部
修　理	解体中	文献資料	
発掘調査	『史跡高松城跡地久櫓発掘調査概報（平成11～15年度）』	その他の調査	
その他記述 1		その他記述 2	

破損現状



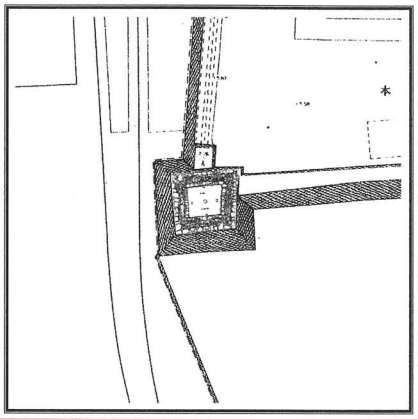
備　考		調査年月日	平成19年 3月30日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は地久櫓台中央にある穴蔵の北壁である。 ・高さは中央部で約1.9m、全長は天端で約5.6mである。 ・勾配は87度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石を用いた乱積である。両隅角とも入隅である。 ・石材は丸みのあるものが多く、規模はやや小ぶりである。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・平成11年度から解体修理が行われている。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	1036	地区	本丸	石垣様式	積み方	野面	石垣位置
石垣部位	穴蔵				石積工法	乱積	
方　位	西				角石(算木) 左		
角の形状	左隅角	入			角石(算木) 右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	地久櫓				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印		無	

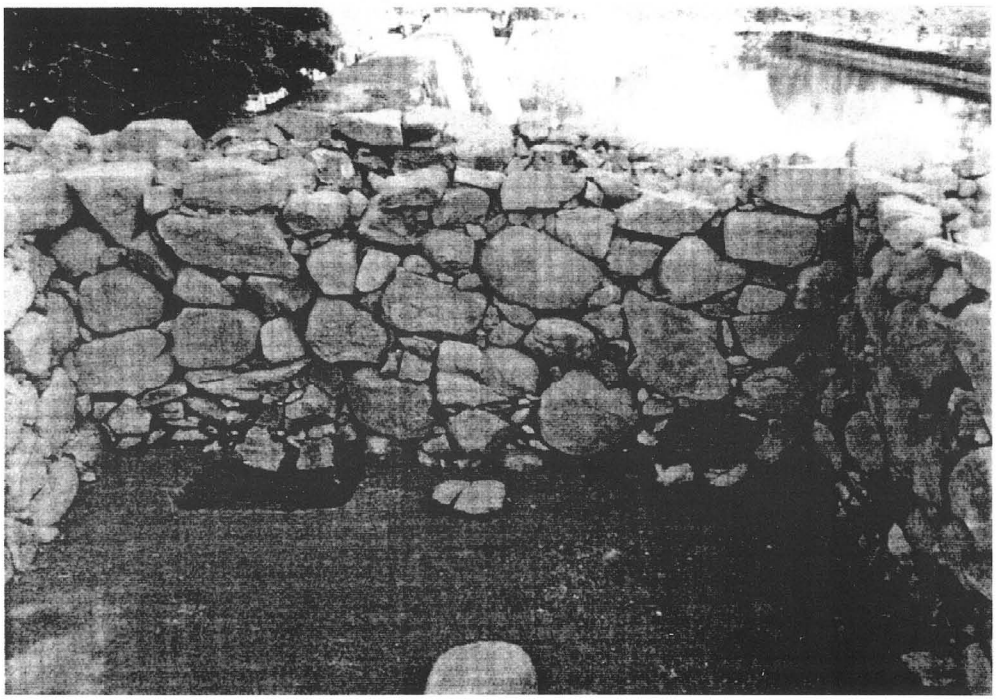


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b3	D

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
		4.64	4.40	1.76	1.92	1.56		85		85	

築造時期	松平初期	改修		基底部	
修　理	解体中	文献資料			
発掘調査	『史跡高松城跡地久櫓発掘調査概報(平成11～15年度)』	その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

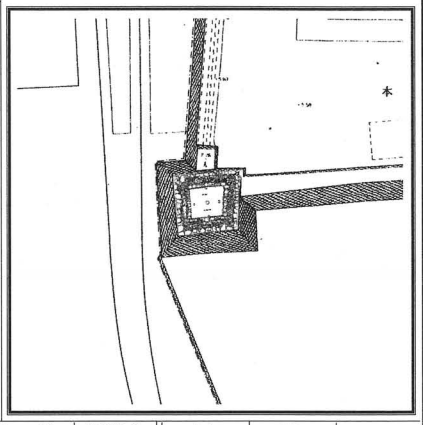


備　考		調査年月日	平成19年 3月30日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は地久櫓台中央にある穴蔵の東壁である。 ・高さは中央部で約2m、全長は天端で約4.8mである。 ・勾配は80度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石を用いた乱積である。両隅角とも入隅である。 ・石材は角張ったものや角が取れて丸みのあるもの等混在する。規模も大小混在する。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・平成11年度から解体修理が行われている。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

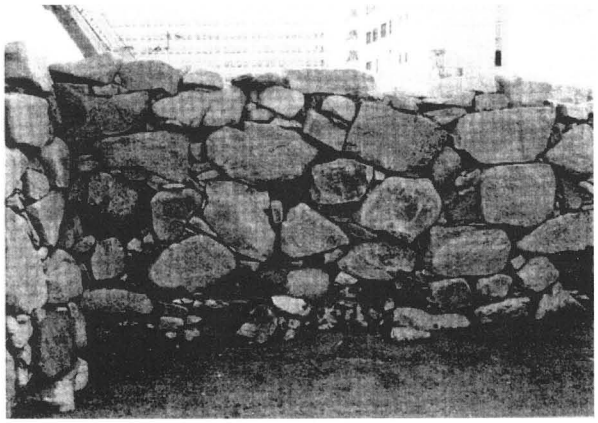
石垣番号	1037	地区	本丸	石垣様式	積み方	野面	石垣位置
石垣部位	穴蔵				石積工法	乱積	
方　位	北				角石（算木）左		
角の形状	左隅角	入			角石（算木）右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	地久櫓				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	無				刻　印	無	

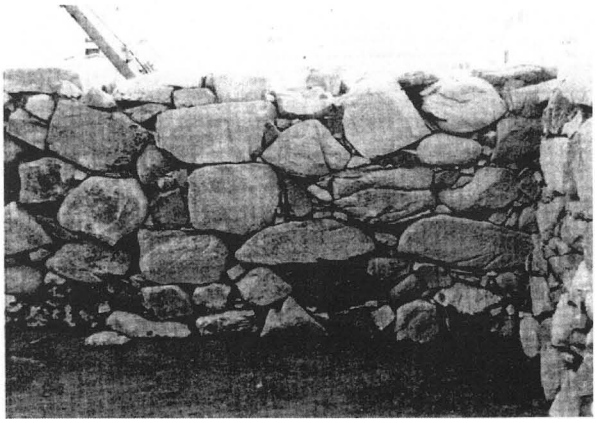
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b3	D

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
		5.60	5.12	1.96	1.88	1.84		85		75	

築造時期	松平初期	改修		基底部	
修　理	解体中	文献資料			
発掘調査	『史跡高松城跡地久櫓発掘調査概報（平成11～15年度）』	その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状





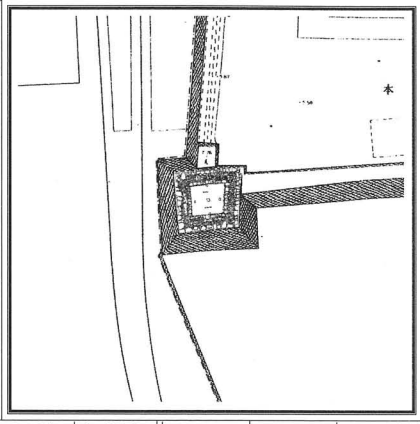
備　考		調査年月日	平成19年 3月30日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は地久櫓台中央にある穴蔵の南壁である。 ・高さは中央部で約1.8m、全長は天端で約5.3mである。 ・勾配は84度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石を用いた乱積である。両隅角とも入隅である。 ・石材は角張ったものや角が取れて丸みのあるもの等混在する。規模も大小混在するが、上部に大ぶりな石材が多く見られる。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・平成11年度から解体修理が行われている。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	1038	地区	本丸	石垣様式	積み方		野面	石垣位置
石垣部位	穴蔵				石積工法		乱積	
方　位	東				角石(算木)	左		
角の形状	左隅角	入				右		
	右隅角	入			その他特記			
上部構造物	地久櫓				石材		花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印			無	

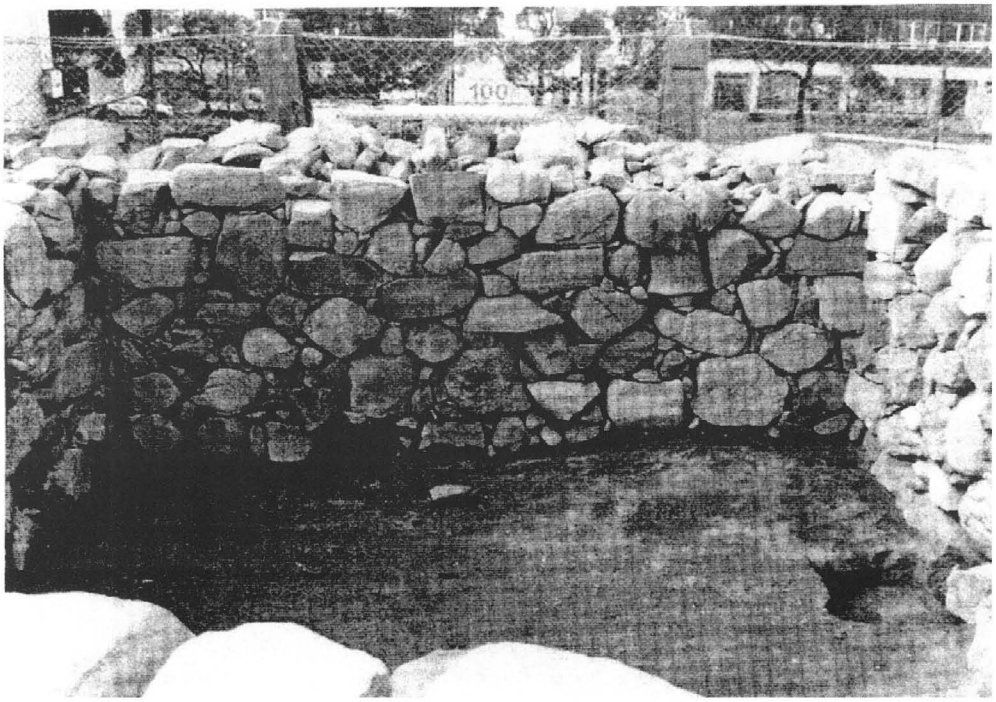


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
												a3	b3	D

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
		4.72	4.48	1.84	2.0	2.12		75		85	

築造時期	松平初期	改修		基底部	
修　理	解体中	文献資料			
発掘調査	『史跡高松城跡地久櫓発掘調査概報(平成11～15年度)』	その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



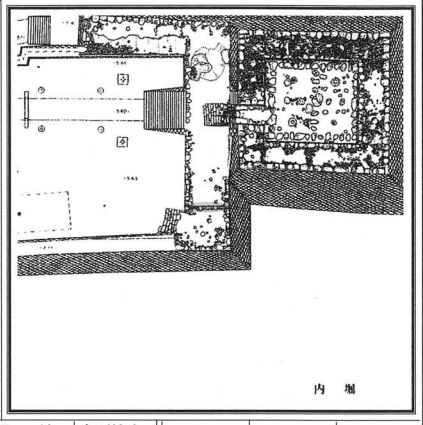
備　考		調査年月日	平成19年 3月30日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は地久櫓台中央にある穴蔵の西壁である。 ・高さは中央部で約1.9m、全長は天端で約4.6mである。 ・勾配は84度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石を用いた乱積である。両隅角とも入隅である。 ・石材は角張ったものや角が取れて丸みのあるもの等混在する。規模も大小混在するが、大ぶりなものが多い。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・平成11年度から解体修理が行われている。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	1039	地区	本丸	石垣様式	積み方	割石	石垣位置
石垣部位	内（多聞櫓台）				石積工法	布積	
方　位	北				角石（算木）左		
角の形状	左隅角	すりつけ			角石（算木）右		
	右隅角	すりつけ			その他特記		
上部構造物	多聞櫓				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	6.0	5.20	0.42	0.35	0.24		90	90	90	

築造時期	生駒期・松平初期・新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『旧高松御城全図』		
発掘調査	平成18年度	その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

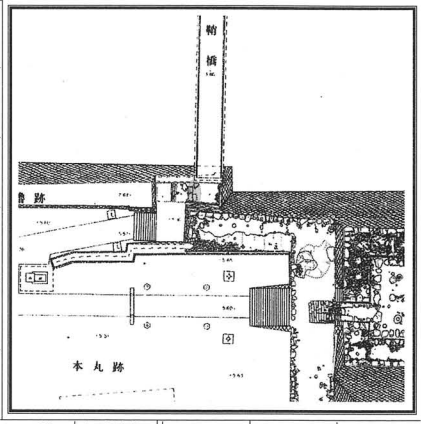
備　考		調査年月日	平成19年 3月30日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は本丸多聞櫓の南側を区画する北面石垣である。 ・高さは中央部で約0.4m、全長は天端で約6.0mである。 ・勾配は90度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた布積である。1段ないしは2段積であり、右端部は上段の石が無くなっている。 ・石材は方形で、規模は大小混在するが、上段の石は大ぶりである。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・築造時期は不明である。 ・絵図にはこの石垣に続く多聞櫓台が西へ延びているが、現状では無いことから明治以降に改変があったと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	1040	地区	本丸	石垣様式	積み方	割石	石垣位置
石垣部位	その他				石積工法	布積	
方　位	東				角石(算木) 左		
角の形状	左隅角	すりつけ			角石(算木) 右		
	右隅角	不明			その他特記		
上部構造物	-				石材	安山岩、花崗岩	
転用石	無				刻　印	無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
		n1										a2	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	2.8	2.62	0.57	0.5	0.31		90	90	90	

築造時期	生駒期・松平初期・新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査	平成18年度	その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

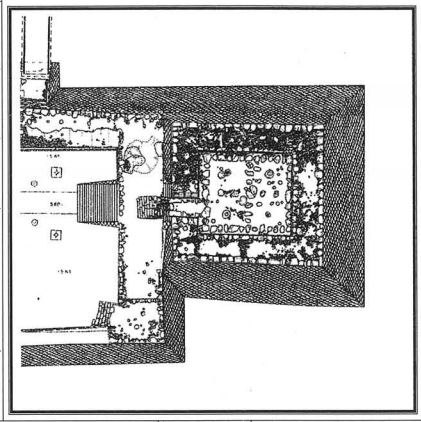
破損現状

備　考		調査年月日	平成19年 3月30日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は本丸虎口を区画する東面石垣である。 ・高さは中央部で約0.5m、全長は天端で約2.8mである。 ・勾配は90度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の割石を用いた布積である。2段積であり、北端の石は前方に動かされている。 ・石材は方形で、規模は標準的なもので揃っている。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・北端の石を除き、良好な状態である。
石垣の変遷	・築造・変遷については不明である。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	1041	地区	本丸	石垣様式	積み方		野面	石垣位置
石垣部位	穴蔵				石積工法		乱積	
方　位	南				角石（算木）	左	切石	
角の形状	左隅角	出				右	切石	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	天守				石材		花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印			上	

破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
		s4			s2				s2	r23		a2	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	3.8	4.2	2.14	2.66	2.7	86				86

築造時期	松平初期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』		
発掘調査	平成18年度	その他の調査			
その他記述 1	左隅角に金物の痕跡	その他記述 2			

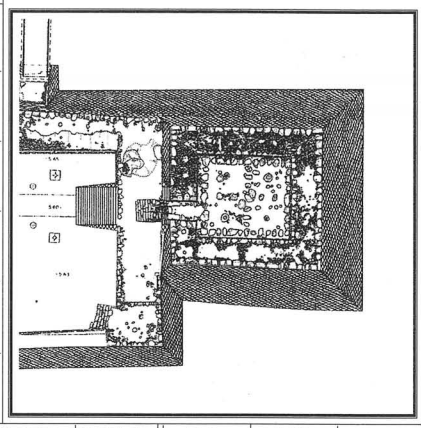
破損現状

備　考		調査年月日	平成19年 3月30日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は天守台の穴蔵入口の北壁である。 ・高さは中央部で約2.7m、全長は天端で3.8mである。 ・勾配は86度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石を用いた乱積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。 ・石材は方形で、角張ったものが多く、規模はやや大ぶりなものが多い。 ・両隅角とも完成度の高い算木積である。 ・転用石は見られない。 ・刻印は天端中央に上、天端中央の上面に上が見られる。 ・左隅角に金物の痕跡が見られる。 ・目地は見られない。
破損状況	・玉藻廟に伴う階段設置のため左隅角の最上段の石が欠損している。 ・右端付近の間詰石のヌケが見られるが、概ね良好な状態である。 ・昭和38年のボーリング調査に伴う穴がある。
石垣の変遷	・天守改築に伴い築造されたと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	1042	地区	本丸	石垣様式	積み方	野面	石垣位置
石垣部位	穴蔵				石積工法	乱積	
方　位	東				角石(算木) 左	切石	
角の形状	左隅角	出			角石(算木) 右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	天守				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	無				刻　印	×	

破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
		s1							s23			a2	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	7.1	6.87	2.7	2.51	2.5	86			80	

築造時期	松平初期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』		
発掘調査	平成18年度	その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

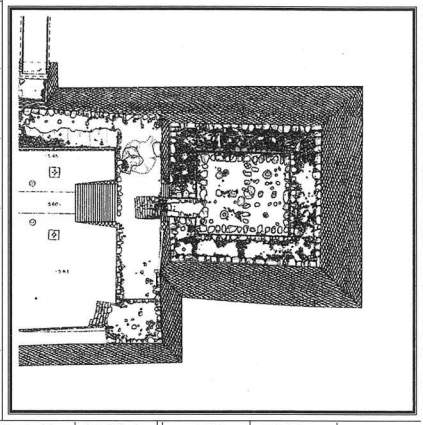
破損現状

備　考		調査年月日	平成19年 3月30日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は天守台の穴蔵の西壁である。 ・高さは中央部で約2.5m、全長は天端で約7.1mである。 ・勾配は80～86度と変化する。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石を用いた乱積である。左隅角は切石を用いて積み上げられている。右隅角は入隅である。 ・石材は角張ったものや角が取れて丸みのあるもの等混在する。規模はやや大ぶりなものが多い。 ・左隅角は完成度の高い算木積である。 ・転用石は見られない。 ・刻印は左隅角3石目に×が見られる。 ・目地は見られない。
破損状況	・玉藻廟建築により最上段の石が欠損するところが見られる。 ・間詰石のヌケが見られるが、概ね良好な状態である。
石垣の変遷	・天守改築に伴い築造されたと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	1043	地区	本丸	石垣様式	積み方	野面	石垣位置
石垣部位	穴蔵				石積工法	乱積	
方　位	南				角石（算木）左		
角の形状	左隅角	入			角石（算木）右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	天守				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	無				刻　印	無	

破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
					s1				s23			a2	b3	D

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
		14.05	13.52	2.43	2.4	2.31		80		80	

築造時期	松平初期	改修	基底部
修　理		文献資料	『小神野夜話』
発掘調査	平成18年度	その他の調査	
その他記述 1		その他記述 2	

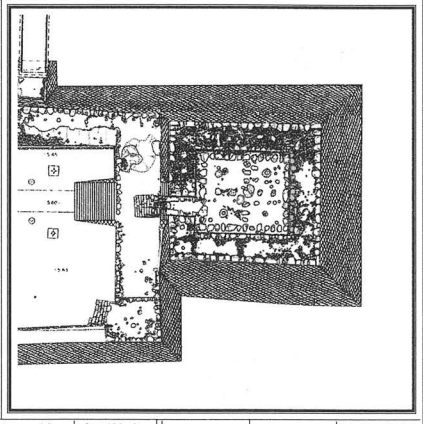
破損現状

備　考		調査年月日	平成19年 3月30日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は天守台の穴蔵の北壁である。 ・高さは中央部で約2.4m、全長は天端で約14mである。 ・勾配は80度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石を用いた乱積である。両隅角とも入隅である。 ・石材は角張ったものや角が取れて丸みのあるもの等混在する。規模はやや大ぶりなものが多い。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・間詰石のヌケが見られるが、概ね良好な状態である。
石垣の変遷	・天守改築に伴い築造されたと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	1044	地区	本丸	石垣様式	積み方	野面	石垣位置
石垣部位	穴蔵				石積工法	乱積	
方　位	西				角石（算木）左		
角の形状	左隅角	入			角石（算木）右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	天守				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	無				刻　印	無	

破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
									s23			a2	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	12.44	12.03	2.31	2.36	2.37		83		82	

築造時期	松平初期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』		
発掘調査	平成18年度	その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

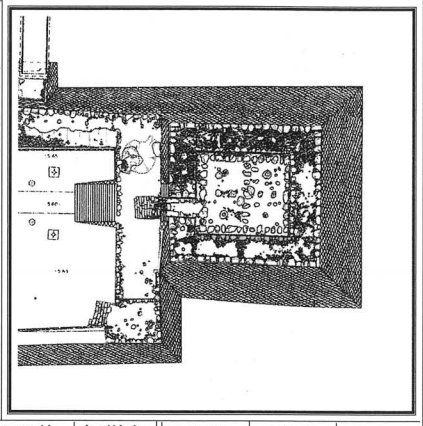
破損現状

備　考		調査年月日	平成19年 3月30日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は天守台の穴蔵の東壁である。 ・高さは中央部で約2.3m、全長は天端で約12.4mである。 ・勾配は82度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石を用いた乱積である。両隅角とも入隅である。 ・石材は角張ったものや角が取れて丸みのあるもの等混在する。規模はやや大ぶりなものが多い。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・間詰石のヌケが見られるが、概ね良好な状態である。
石垣の変遷	・天守改築に伴い築造されたと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	1045	地区	本丸	石垣様式	積み方	野面	石垣位置
石垣部位	穴蔵				石積工法	乱積	
方　位	北				角石(算木) 左		
角の形状	左隅角	入			角石(算木) 右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	天守				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印		無	

破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
		s1							s23			a2	b3	D

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
		14.16	13.4	2.45	2.44	2.4		83		84	

築造時期	松平初期	改修	基底部
修　理		文献資料	『小神野夜話』
発掘調査	平成18年度	その他の調査	
その他記述 1		その他記述 2	

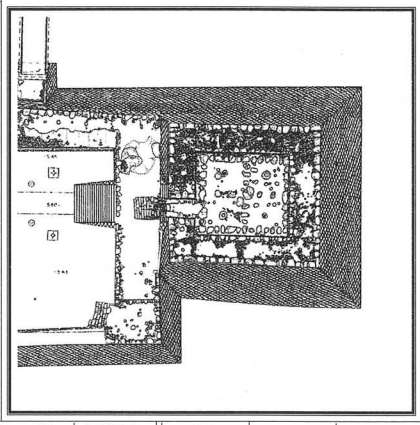
破損現状

備　考		調査年月日	平成19年 3月30日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は天守台の穴蔵の南壁である。 ・高さは中央部で約2.4m、全長は天端で約14.2mである。 ・勾配は83度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石を用いた乱積である。両隅角とも入隅である。 ・石材は角張ったものや角が取れて丸みのあるものが混在する。規模はやや大ぶりなものが多い。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・間詰石のヌケと最上段の石の欠損が見られるが、概ね良好な状態である。
石垣の変遷	・天守改築に伴い築造されたと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	1046	地区	本丸	石垣様式	積み方	野面	石垣位置
石垣部位	穴蔵				石積工法	乱積	
方　位	東				角石（算木） 左		
角の形状	左隅角	入			角石（算木） 右	切石	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	天守				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	無				刻　印	○の中に×	

破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
		s1										a2	b3	D

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
		2.55	2.5	2.5		2.76		80			80

築造時期	松平初期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』		
発掘調査	平成18年度	その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

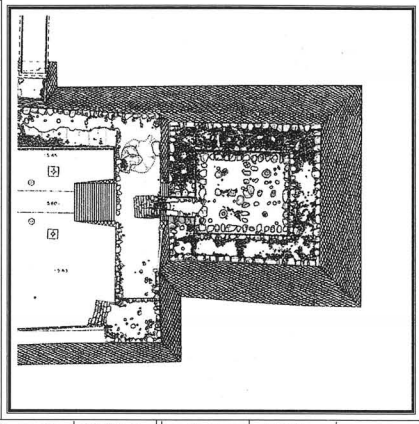
破損現状

備　考		調査年月日	平成19年 3月30日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は天守台の穴蔵の西壁である。 ・高さは右端で約2.8m、全長は天端で約2.5mである。 ・勾配は80～85度と変化する。
積み方石材等	・石積は花崗岩、安山岩の野面石を用いた乱積である。右隅角は切石を用いて積み上げられている。左隅は入隅である。 ・石材は角張ったものが多く、規模は大ぶりなものが多い。 ・右隅角は完成度の高い算木積である。 ・転用石は見られない。 ・刻印は右隅角2石目に○の中に×が見られる。 ・目地は見られない。
破損状況	・最上段の石の欠損が見られるが、概ね良好な状態である。
石垣の変遷	・天守改築に伴い築造されたと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	1047	地区	本丸	石垣様式	積み方		野面	石垣位置
石垣部位	穴蔵				石積工法		乱積	
方　位	北				角石(算木)	左	切石	
角の形状	左隅角	出				右	切石	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	天守				石材		花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印			無	

破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
									s23	R13	有	a2	b3	D

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
		3.7	4.24	2.66		2.45	85				88

築造時期	松平初期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』		
発掘調査	平成18年度	その他の調査			
その他記述 1	右隅角に金物の痕跡	その他記述 2			

破損現状

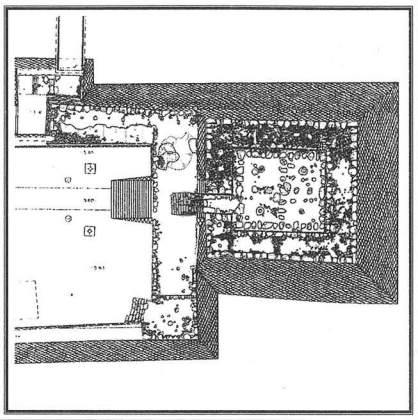
備　考		調査年月日	平成19年 3月30日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は天守台の穴蔵入口の南壁である。 ・高さは中央部で約2.6m、全長は天端で約3.7mである。 ・勾配は85～88度と変化する。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石を用いた乱積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。 ・石材は角張ったものが多く、規模は大ぶりである。 ・両隅角とも完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・右隅角に金物の痕跡が見られる。 ・目地は見られない。
破損状況	・最上段に土管設置による破損がある。 ・昭和38年のボーリング調査に伴う穴がある。
石垣の変遷	・天守改築に伴い築造されたと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	1048	地区	本丸	石垣様式	積み方	切石、野面	石垣位置
石垣部位	雁木				石積工法		
方　位	西				角石（算木）左		
角の形状	左隅角	出			角石（算木）右		
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	-				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	無				刻　印	長方形	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
				s23				R12				a1	b2	B

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
		2.84	2.98			2.38					

築造時期	松平初期	改修	有	基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』		
発掘調査	平成18年度	その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

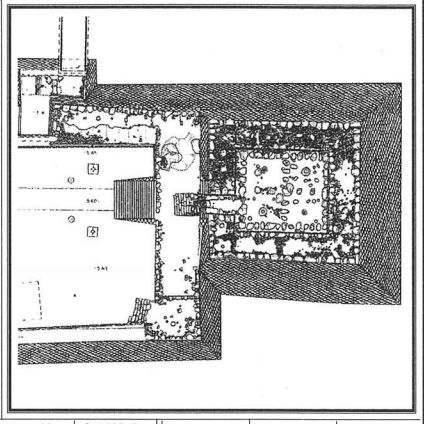
備　考		調査年月日	

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は本丸から天守へ上る雁木の上段である。 ・最下段の幅は約3.0m、高さは右端で約2.4mである。 ・残存する段数は10段である。
積み方石材等	・石の積み方は、最上段から4段目までの踏み面は安山岩の野面石、5段目以下は花崗岩の切石を用いた石段である。側面は安山岩、花崗岩の野面石の乱積である。 ・石材は角張ったものと角が取れて丸みのあるものが混在し、規模はやや小ぶりである。 ・転用石は見られない。 ・刻印は7段目踏石の右側面に長方形、8段目踏石の右側面に長方形が見られる。
破損状況	・最上段から4段目までの踏み面は破損が著しい。 ・左側面にハラミが見られる。
石垣の変遷	・天守改築に伴い築造されたと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	1049	地区	本丸	石垣様式	積み方	切石、野面	石垣位置
石垣部位	雁木				石積工法		
方　位	西				角石（算木）左		
角の形状	左隅角	出			角石（算木）右		
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	-				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	無				刻　印		



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
				s23				R12				a1	b2	B

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
		4.3	4.3	2.42							

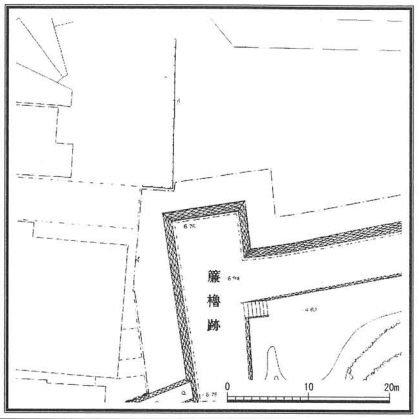
築造時期	松平初期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』		
発掘調査	平成19年度	その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			
破損現状					
備　考		調査年月日			

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は本丸から天守へ上る雁木の下段である。 ・中段の幅は約4.3m、高さは左端で約2.4mである。 ・段数は11段である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石と安山岩の野面石を用いた石段である。側面は花崗岩、安山岩の野面石の乱積である。 ・石材は角張ったものと角が取れて丸みのあるものが混在し、規模はやや小ぶりである。 ・転用石は見られない。 ・刻印は見られないが、雁木上面で検出した石材に分銅形が見られる。検出された刻印石は天守穴蔵入口部分にあたるNo.1041石垣の左隅角最上段に該当する可能性が高い。 ・目地は見られない。
破損状況	・踏み面は最上段から3段目までの左右両端の破損が著しい。 ・左側面にわずかなハラミが見られる。 ・右側面は玉藻廟の石段による破損が著しく、基底部の1段のみ残存する。
石垣の変遷	・天守改築に伴い築造されたと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	2001	地区	二ノ丸	石垣様式	積み方		野面	石垣位置
石垣部位	外(海に面する)				石積工法		乱積	
方　位	北				角石(算木)	左	割石	
角の形状	左隅角	出				右	割石	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	簾櫓				石材		花崗岩、凝灰岩(一部)	
転用石	無			刻　印			無	

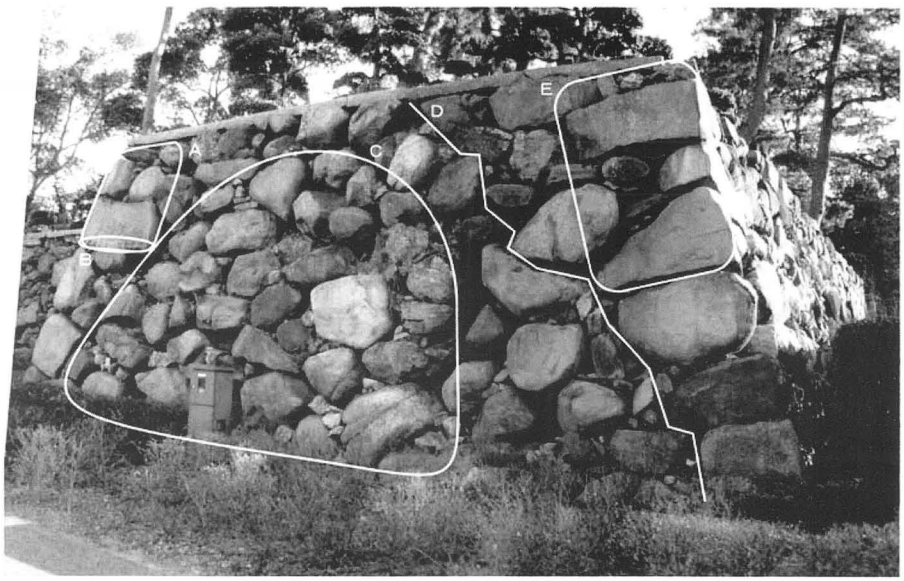


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
				s12								a2	b1	B

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	8.48	10.75	4.25	4.25	4.49	63	70	75	87	70

築造時期	生駒期	改修	有	基底部	
修　理		文献資料	『英公外記』		
発掘調査	『高松市文化財調査報告書　史跡高松城』	その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A. 積み方が不自然
B. 矢穴
C. ハラミ
D. 目地
E. 算木積
※間詰石のヌケ
(後から入れている)

※上半の算木（切石）は他と石材加工も異なり、後世の改修とみられる。下半は算木がみられない。他は全て野面石。

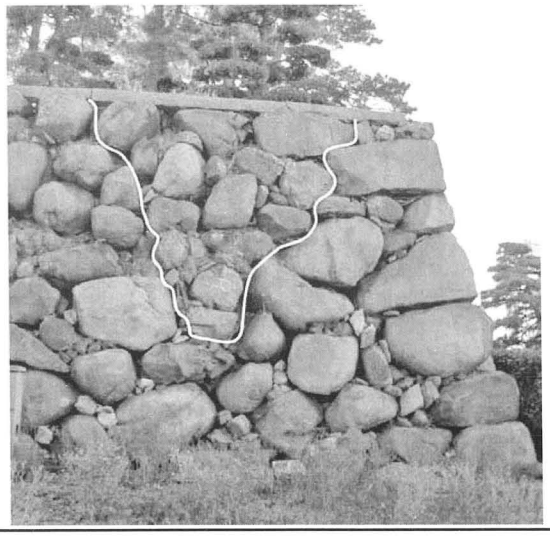
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は二ノ丸北東隅の旧海面外壁石垣であり、簾櫓台の北面を構成する。現状では外部道路歩道に面する。 ・高さは中央部で約4.3mであるが、下部は埋められており本来はもっと高い石垣である。全長は天端で約8.5mである。 ・勾配は75度とやや緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の野面石を用いた乱積である。両隅角とも下半が野面石、上半が割石によって積み上げられている。 ・石材は丸みのある形状のものが多い。石材の規模は大きいものが多いが、小石材も混在する。 ・両隅角は完成度の低い算木積である。左隅角では隅角石と築石の合端がかみ合っていない等積み方が乱雑なところが見られる。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・石垣上部から下段にかけて薄いハラミが見られる。 ・間詰石のヌケが多く、ヌケ部分にコンクリート片等を詰め込んでいる。
石垣の変遷	・両隅角の石材が上下により異なることから、積み直しが考えられる。 ・『英公外記』によると寛文2年(1662)に落雷により建物の焼失があったと記載されており、同時期に石垣の積み直しがあった可能性がある。

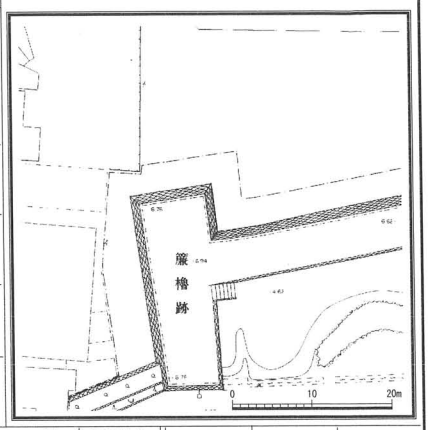
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
左隅角下部から右上がりで天端まで至る目地	左側	花崗岩	丸み	ほぼ同規模	野面石乱積	隅角部積み直し
	右側	花崗岩	丸み		野面石乱積	
右隅角近傍天端から右側へ谷形の目地	谷形の中	花崗岩	丸み	中はやや小ぶり	野面石乱積	積み直し
	谷形の外	花崗岩	丸み		野面石乱積	



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	2002	地区	二ノ丸	石垣様式	積み方	野面	石垣位置
石垣部位	外(海に面する)				石積工法	乱積	
方　位	東				角石(算木) 左		
角の形状	左隅角	入			角石(算木) 右	野面、割石	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	簾櫓				石材	花崗岩、安山岩(一部)、凝灰岩(一部)	
転用石	無			刻　印		無	

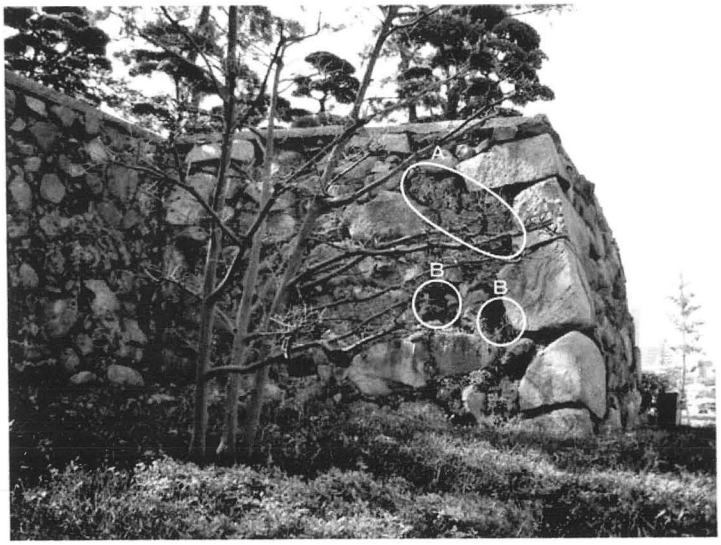


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
			s2						s2		有	a1	b1	A

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	6.08	5.46	4.37	4.26	4.21	76	75	70	69	63

築造時期	生駒期	改修	有	基底部	
修　理		文献資料	『英公外記』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．ズレ出し
B．間詰石のヌケ
※モルタルで全面を固める

※出隅の下半は算木積とならず、不安定

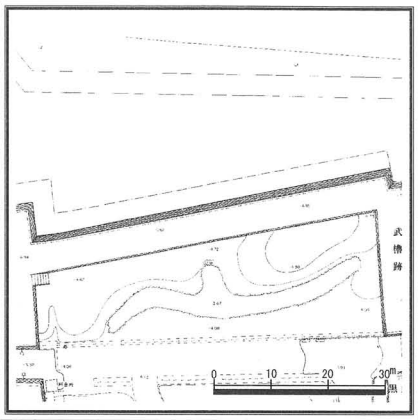
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は二ノ丸北東部の旧海面外壁の東面石垣であり、廉櫓台の東面を構成する。現状では外部通路歩道に面する。 ・高さは中央部で約4.3mであるが、下部は埋められており本来はもっと高い石垣である。全長は天端で約6.1mである。 ・勾配は70度とやや緩やかである。
積み方石材等	・石材は花崗岩の野面石を用いた乱積である。右隅角は下半が野面石、上半が割石によって積み上げられている。左隅角は入隅である。 ・石材は丸みのある形状のものが多い。石材の規模は大きいものが多いが、小石材も混在する。 ・右隅角は完成度の低い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・右隅角中段の隅角石が前面へ突き出すようにズレが見られ、不安定な状態にある。 ・ほぼ全面の目地にモルタルが詰められている。
石垣の変遷	・右隅角の石材が上下により異なることから積み直しが考えられる。 ・『英公外記』によると寛文2年(1662)に落雷により建物の焼失があったと記載されており、同時期に石垣の積み直しがあった可能性が考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	2003	地区	二ノ丸	石垣様式	積み方		野面	石垣位置
石垣部位	外(海に面する)				石積工法		乱積	
方　位	北				角石(算木)	左	切石	
角の形状	左隅角	出				右		
	右隅角	入			その他特記			
上部構造物	多聞櫓				石材		花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	

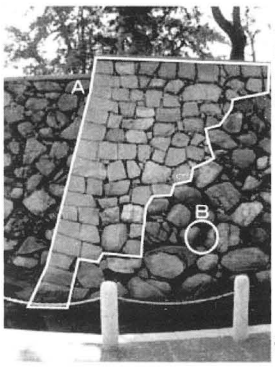


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
		s1	s2	s2					s2	r3	有	a2	b1	B

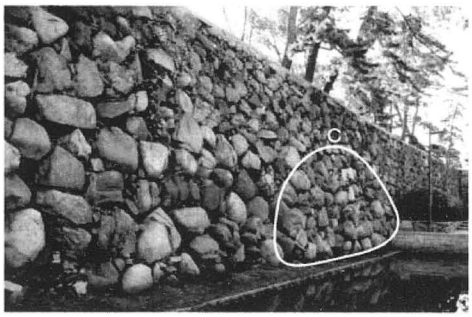
石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	61.92	62.34	6.37	6.09	4.2	70	75	77	68	76

築造時期	生駒期	改修	有	基底部	
修　理		文献資料	『英公外記』『高松城下図屏風』『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

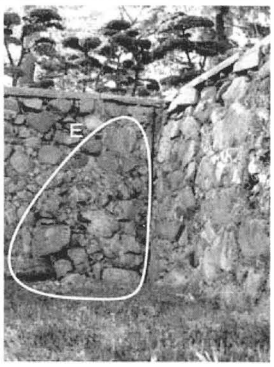
破損現状



A. 後世の積み直し
B. 間詰石ヌケ
C. ハラミ
D. 欠損
E. モルタル詰め



※下から１ｍぐらいの間に焼損あり(1662年の火災の跡？)
全体に間詰石のヌケが多くみられる



備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

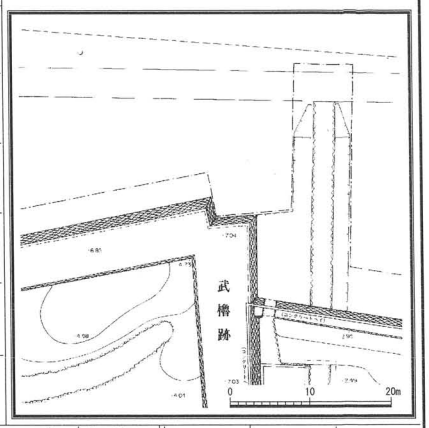
位置・規模等	・本石垣は二ノ丸北部の旧海面外壁石垣であり、簾櫓と武櫓をつなぐ多聞櫓台北面石垣である。現状では外部道路歩道に面する。 ・高さは中央部で約6.1m、全長は天端で約61.9mで、長大な石垣である。 ・勾配は68～77度と場所によって一定しないが、概ね緩やかである。
積み方石材等	・石材は花崗岩の野面石を用いた乱積である。左隅角は切石によって積み上げられている。右隅角は入隅である。 ・石材は丸みのある形状のものが多い。石材の規模は40～50cm程度の標準的なものが多いが、大石材や小石材も混在する。 ・左隅角は完成度の低い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・石垣中段から下段にかけて薄いハラミやズレが見られる。 ・天端では欠損が見られる。 ・間詰石のヌケも散見される。 ・築石部中央の下部では、焼損が見られ、寛文2年(1662)の火事によるものと考えられる。
石垣の変遷	・部分的な積み直しは見られるが、築造当時のものが残る可能性が考えられる。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
左隅角下部から右上がりに天端まで至る目地	左側	花崗岩	方形角張る	左側がやや小ぶり	切石乱積	左隅角部積み直し
	右側	花崗岩	方形丸み		野面石乱積	
笠石下の目地	上方	花崗岩	扁平	上方は厚みの薄い石材	切石布積	笠石の積み上げ
	下方	花崗岩	方形丸み		野面石乱積	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	2004	地区	二ノ丸	石垣様式	積み方		割石	石垣位置
石垣部位	外(海に面する)				石積工法		乱積	
方　位	東				角石(算木)	左		
角の形状	左隅角	入				右	切石	
	右隅角	出			その他特記		ソリ上3石	
上部構造物	多聞櫓				石材		花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	

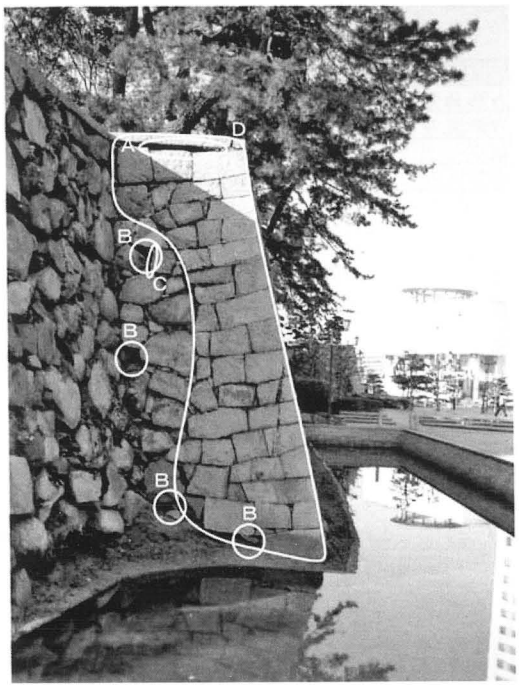


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好	s23							s2			a3	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	2.23	2.75	5.8	-	6.31	75	85	-	81	70

築造時期	松平初期	改修	有	基底部	
修　理		文献資料	『英公外記』『高松城下図屏風』『旧高松御城全図』		
発掘調査	『高松市文化財調査報告書　史跡高松城』	その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．隙間
B．ヌケ
C．矢穴
D．後世の積み直し部分

備　考	短い石垣のため中央高・中央勾配省略	調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

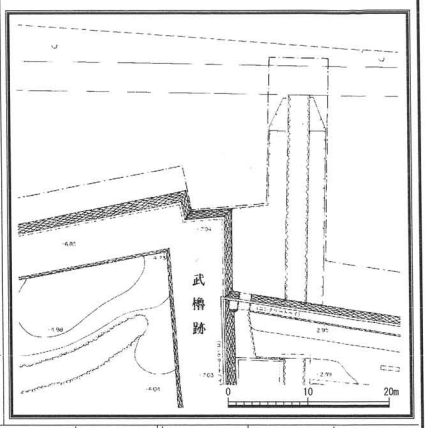
位置・規模等	・本石垣は二ノ丸北部の旧海面外壁石垣であり、廉櫓と武櫓をつなぐ多聞櫓台の東面石垣である。 ・高さは右端で約6.3mであり、全長は天端で約2.2mである。 ・勾配は81度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた乱積である。右隅角は切石を用いた布積によって積み上げられている。左隅角は入隅である。 ・石材は丸みのある形状のものと方形の切石が使用され、規模は両石材ともやや小ぶりである。 ・右隅角は完成度の低い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・間詰のヌケが見られるが、概ね良好である。
石垣の変遷	・『高松城下図屏風』によると、№2003石垣と№2006石垣が出隅によって接合するように描かれているが、『旧高松御城全図』では現状のように描かれており、松平期に入り№2003石垣と№2006石垣の出隅部分を改変し、入隅にしたと考えられる。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
右隅角部近傍の縦目地	左側	花崗岩	方形丸み	ほぼ同規模	割石乱積	右隅角部の積み直し
	右側	花崗岩	方形		切石布積	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	2005	地区	二ノ丸	石垣様式	積み方	野面	石垣位置
石垣部位	外(海に面する)				石積工法	乱積	
方　位	北				角石(算木) 左	野面、割石	
角の形状	左隅角	出			角石(算木) 右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	武櫓				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	

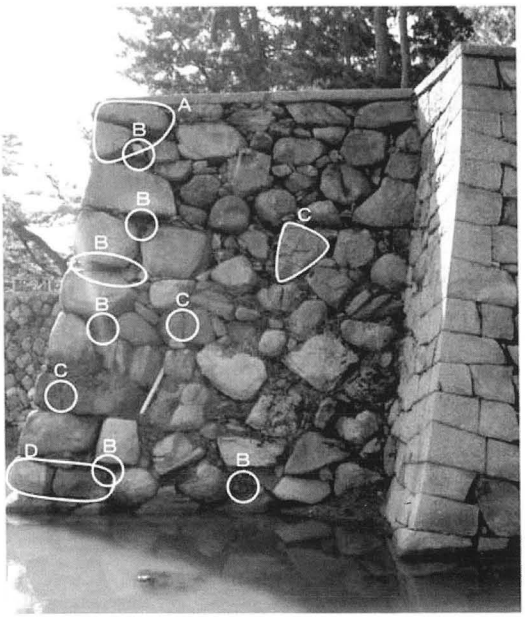


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
			s4		s24				s234			a1	b1	A

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	5.05	5.59	6.37	6.18	5.81	71	79	79	78	75

築造時期	松平初期	改修	基底部
修　理		文献資料	『英公外記』『高松城下図屏風』『旧高松御城全図』
発掘調査	『高松市文化財調査報告書　史跡高松城』	その他の調査	
その他記述 1		その他記述 2	

破損現状



A．ズレ出し
B．間詰めのヌケ
C．ワレ
D．割れた石材が分離している

※間詰石のヌケが多くみられ、出隅部にも空隙があるため不安定な状態

下から２石目の石材のワレによる荷重不均衡で上部石材にもワレ等を引き起こしている

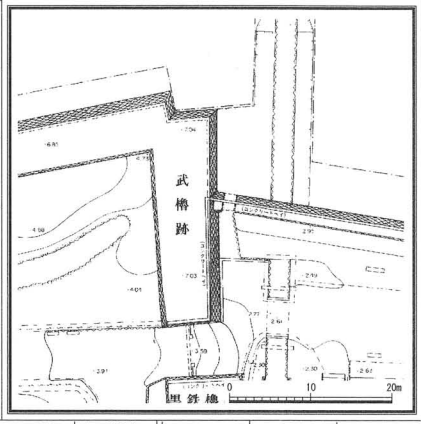
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は二ノ丸北部の旧海面外壁石垣であり、武櫓台の北面を構成する石垣である。 ・高さは中央部で約6.2m、全長は天端で約5.1mである。 ・勾配は79度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の野面石を用いた乱積である。左隅角下半は野面石、上半は割石を用いて積み上げられている。右隅角は入隅である。 ・石材は丸みのある形状のものが多い。石材の規模は40～50cm程度の標準的なものが多いが、大石材や小石材も混在する。 ・左隅角は算木積を意識しているが、完成度は低い。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・左隅角では石材のワレ、ズレなど大きな変形が見られ、合端がかみ合っておらず極めて不安定な状態にある。 ・間詰石のヌケも多く見られる。
石垣の変遷	・『高松城下図屏風』によると、№2003石垣と№2006石垣が出隅によって接合するように描かれているが、『旧高松御城全図』では現状のように描かれており、松平期に入り№2003石垣と№2006石垣の出隅部分を改変し、入隅にしたと考えられる。 ・左隅角の使用石材が上下で異なることから、改修された可能性が考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	2006	地区	二ノ丸	石垣様式	積み方	野面	石垣位置
石垣部位	外(海に面する)				石積工法	乱積	
方　位	東				角石(算木) 左	割石	
角の形状	左隅角	出			角石(算木) 右	野面	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	武櫓、鉄門				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
			s2		n24				s5	r5		a1	b1	A

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	25.3	26.2	5.57	6.42	6.24	83/76	83/76	85/75	85/73	80/71

築造時期	生駒期	改修	有	基底部	地山、礫敷き
修　理	平成16・17年度解体修理(左隅) 『鉄門石垣調査・整備工事報告書』	文献資料	『英公外記』		
発掘調査	『鉄門石垣調査・整備工事報告書』	その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

A．大矢穴
B．多少ズレ出し
C．間詰石のヌケ
D．重大なワレ（隅角全体に影響）
E．築石代わりに後に間詰石詰め込んだものか
F．焼けによるヒビ
J．根石近くは焼損のある野面
上部は火災後の修築か

※左隅部は平成16年度解体積み直し
（No.2026石垣崩落に伴う）

備　考		調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は二ノ丸北部の旧海面外壁石垣であり、武櫓台の東面を構成する石垣である。三ノ丸の北面石垣によって城内外に画される。 ・高さは中央部で約6.4m、全長は天端で約25.3mである。 ・勾配は75～85度と場所によって一定しないが、概ね平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の野面石を用いた乱積である。左隅角は割石、右隅角は野面石によって積み上げられている。間詰面積の多いゆったりとした積み方である。 ・石材は丸みのある形状のものが多い。石材の規模は40～50cm程度の標準的なものが多いが、大石材も見られる。 ・左隅角は完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・右隅角の下部の石材にはワレ、ズレが生じており、かなり不安定な状態となっている。 ・左側を中心に焼損が広く見られ、寛文2年(1662)の火事によるものと考えられる。
石垣の変遷	・発掘調査によると、石垣下部と上部の勾配が異なっており、また出土遺物や目地から17世紀中葉以降に少なくとも1回以上の積み直しがあったことが判明している。 ・平成16・17年度に左隅角近傍を解体修理。

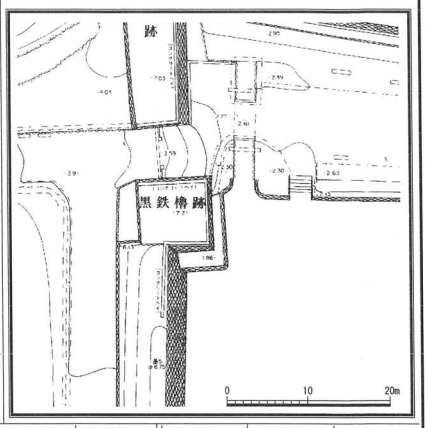
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
右中間天端から左下がりに下部まで至る目地	左側	花崗岩	方形角張る	ほぼ同規模	野面石乱積	積み直しか築造時のもの
	右側	花崗岩	方形角張る		野面石乱積	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	2007	地区	二ノ丸	石垣様式	積み方		割石、野面
石垣部位	外(内堀に面する)				石積工法		谷積、乱積(一部)
方　位	東				角石(算木)	左	割石
角の形状	左隅角	出				右	割石
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	黒櫓				石材		花崗岩、安山岩
転用石	無			刻　印			無

石垣位置



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	9.09	9.3	5.15	4.95	4.64	75	86	82	85	82

築造時期	松平初期	改修	有	基底部
修　理		文献資料	『高松城下図屏風』	
発掘調査		その他の調査		
その他記述 1		その他記述 2		

破損現状

A. 矢穴
B. 大石

※隅角部以外は全面谷積

備　考		調査年月日	平成16年12月 8日

石垣項目別カルテ

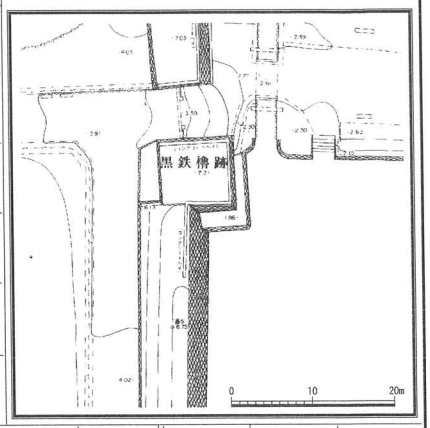
位置・規模等	・本石垣は二ノ丸北東部の黒櫓台の東面石垣である。 ・高さは中央部で約5.0mであるが、石垣下半は後世の石垣と考えられる№2010石垣によって隠れており、本来はもっと高い石垣である。全長は天端で約9.1mである。 ・勾配は82～86度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の割石を用いた谷積であるが、下半は乱積である。両隅角とも割石によって積み上げられている。 ・石材は丸みのある形状のものが多い。石材の規模は40～50cm程度の標準的なものより、やや小ぶりのものが多い。 ・両隅角とも完成度の低い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『高松城下図屏風』では、№2012石垣がそのまま北へ延びているように描かれており、松平初期に築造されたと考えられる。 ・積み方が不統一であり、谷積部分は後世の積み直しと考えられる。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
石垣中段に頂点を持ち両	上方	花崗岩	方形角張る	ほぼ同規模	割石谷積	上方の積み直し
隅角まで至る山形の目地	下方	花崗岩	方形丸み		野面石乱積	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	2008	地区	二ノ丸	石垣様式	積み方	野面	石垣位置
石垣部位	外(内堀に面する)				石積工法	乱積	
方　位	南				角石(算木) 左		
角の形状	左隅角	入			角石(算木) 右	割石	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	黒櫓				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印		無	

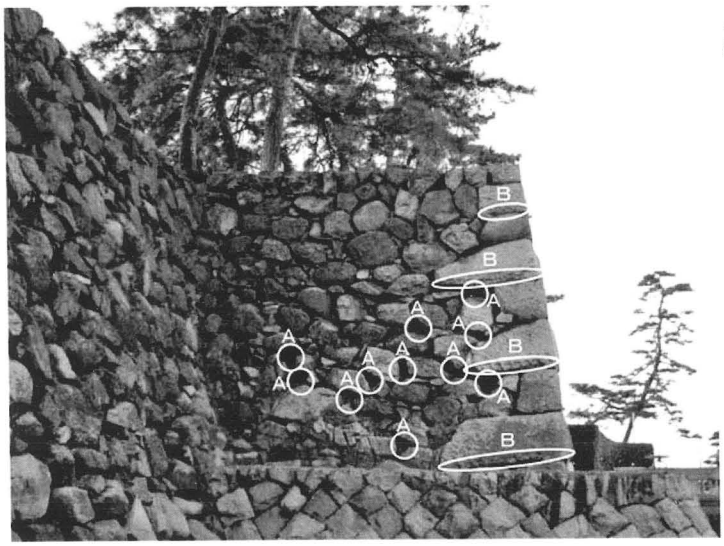


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好								s24			a3	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	3.02	4.66	5.04	4.94	5.14	65	77	73	78	75

築造時期	松平初期	改修	有	基底部
修　理		文献資料	『高松城下図屏風』	
発掘調査		その他の調査		
その他記述 1		その他記述 2		

破損現状



A．間詰石ヌケ
B．矢穴

※斜めの目地が数本入る。後世の積み直しか。

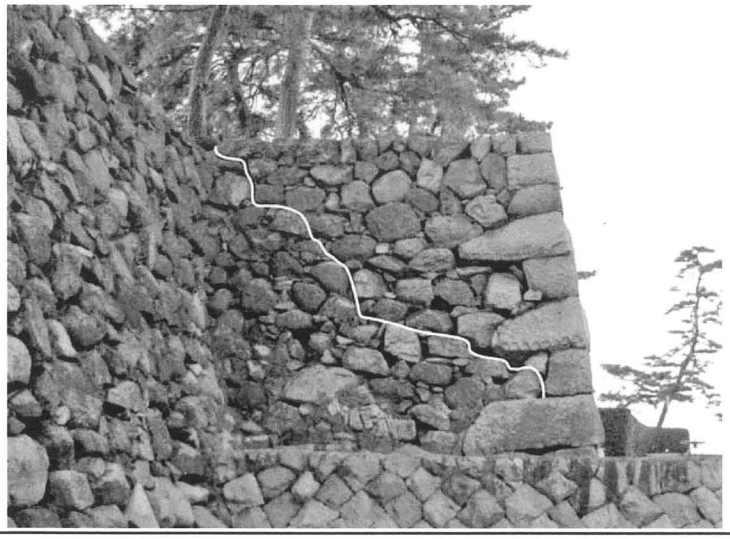
備　考		調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は二ノ丸北東部の黒櫓台の南面石垣である。 ・高さは中央部で約4.9mであるが、石垣下半は後世の石垣と考えられる№2011によって隠れており、本来はもっと高い石垣である。全長は天端で約3.0mである。 ・勾配は73度とやや緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石を用いた乱積である。右隅角は割石によって積み上げられている。左隅角は入隅である。 ・石材は丸みのある形状のものが多い。石材の規模は40～50cm程度の標準的なものよりやや小ぶりのものが多い。 ・右隅角は完成度の低い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・間詰のヌケは見られるが、概ね良好な状態である。
石垣の変遷	・『高松城下図屏風』では、№2012石垣がそのまま北へ延びるように描かれており、松平初期に築造されたと考えられる。

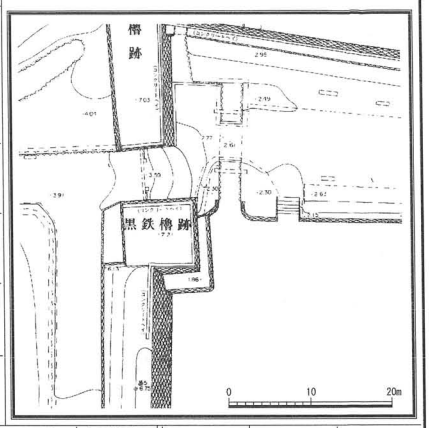
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
左隅角天端から右隅角下部へ至る右下がりの目地	左側	花崗岩	方形丸み	ほぼ同規模	野面石乱積	積み直し
	右側	花崗岩	方形丸み		野面石乱積	



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	2009	地区	二ノ丸	石垣様式	積み方	切石	石垣位置
石垣部位	その他（後世のもの）				石積工法	谷積	
方　位	東南				角石（算木） 左		
角の形状	左隅角	入			角石（算木） 右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	－				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好										有	a3	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	3.19	1.33	0.38	2.72	2.71	69	90	87	85	－

築造時期	明治以降	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

切石の谷積（目地にモルタル）

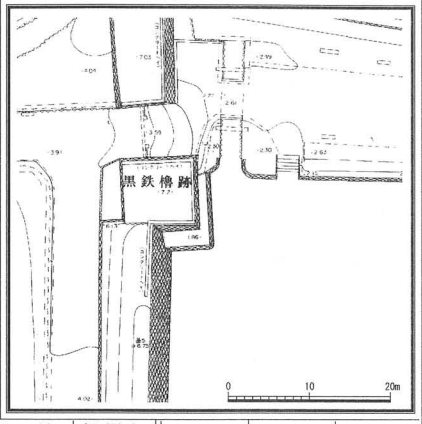
※明治以降のもの

備　考		調査年月日	平成16年12月 8日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は二ノ丸東側の堀石垣であり、導水路の入口にあたる南西面石垣である。 ・高さは中央部で約2.7mで、全長は天端で約4.7mである。 ・勾配は73度とやや緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた谷積である。全体に曲線状の石垣で両隅角とも入隅である。 ・石材は方形で、規模は40～50cm程度の標準的なものよりやや小ぶりのものが多い。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。 ・目地には全面モルタルを詰めている。
石垣の変遷	・明治以降の水門設置時に築造されたものと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

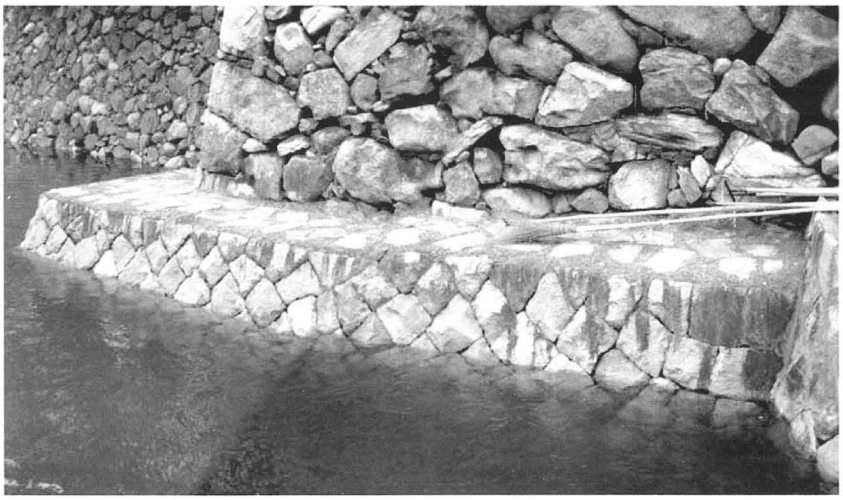
石垣番号	2010	地区	二ノ丸	石垣様式	積み方	切石	石垣位置
石垣部位	その他（後世のもの）				石積工法	谷積	
方　位	東				角石（算木） 左	算木にならない	
角の形状	左隅角	出			角石（算木） 右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	－				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	

破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	8.9	9.5	2.59	2.68	2.77	62	67	70	70	69

築造時期	明治以降	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



切石の谷積

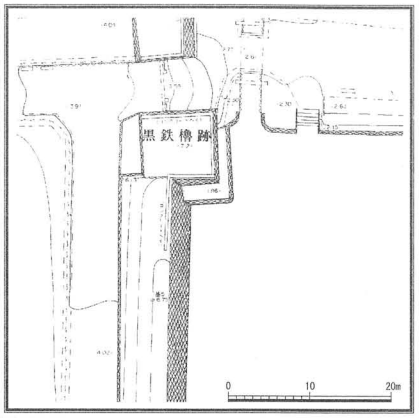
※明治以降のもの

備　考		調査年月日	平成16年12月 8日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は二ノ丸東側の堀石垣であり、黒櫓台の東面腰巻石垣にあたる。 ・高さは中央部で約2.7m、全長は天端で約8.9mである。 ・勾配は70度とやや緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた谷積である。左隅角の出隅は緩やかな曲線を描く。右隅角は入隅である。 ・石材は方形で、規模は40～50cm程度の標準的なものよりやや小ぶりのものが多い。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・明治以降の水門設置時に築造されたものと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	2011	地区	二ノ丸	石垣様式	積み方		切石	石垣位置
石垣部位	その他（後世のもの）				石積工法		谷積	
方　位	南				角石（算木）	左		
角の形状	左隅角	入				右	算木にならない	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	－				石材		花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	

破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	2.61	2.61	1.9	2.09	2.52	60	68	67	67	62

築造時期	明治以降	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

切石の谷積

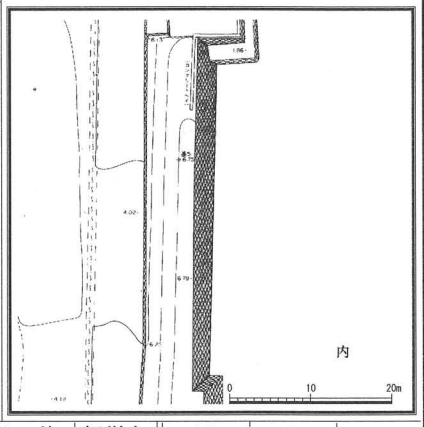
※明治以降のもの

備　考		調査年月日	平成16年12月 8日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は二ノ丸東側の堀石垣であり、黒櫓台の南面腰巻石垣にあたる。 ・高さは中央部で約2.1m、全長は天端で約2.6mである。 ・勾配は67度とかなり緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた谷積である。右隅角は緩やかな曲線を描く。左隅角は入隅である。 ・石材は方形で、規模は40～50cm程度の標準的なものよりやや小ぶりのものが多い。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・明治以降の水門設置時に築造されたものと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

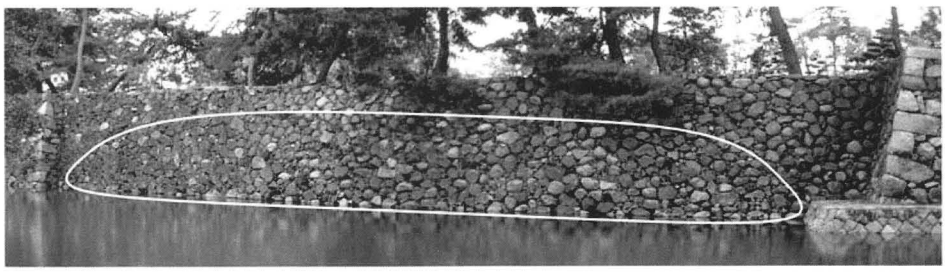
石垣番号	2012	地区	二ノ丸	石垣様式	積み方	野面	石垣位置
石垣部位	外(内堀に面する)				石積工法	乱積	
方　位	東				角石(算木) 左		
角の形状	左隅角	入			角石(算木) 右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	塀				石材	花崗岩、安山岩、凝灰岩(一部)	
転用石	無			刻　印		無	

破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
				s2					w3s2		有	a2	b2	B

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
		43.29	38.0/2.0	7.53	6.93	4.69	76（上）	78(上)	65(上)	73	65

築造時期	生駒期	改修	有	基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



ハラミ
※水際凝灰岩が多い
　ヌケたところを後で詰めてモルタル詰めしているが上部がハラミ出し

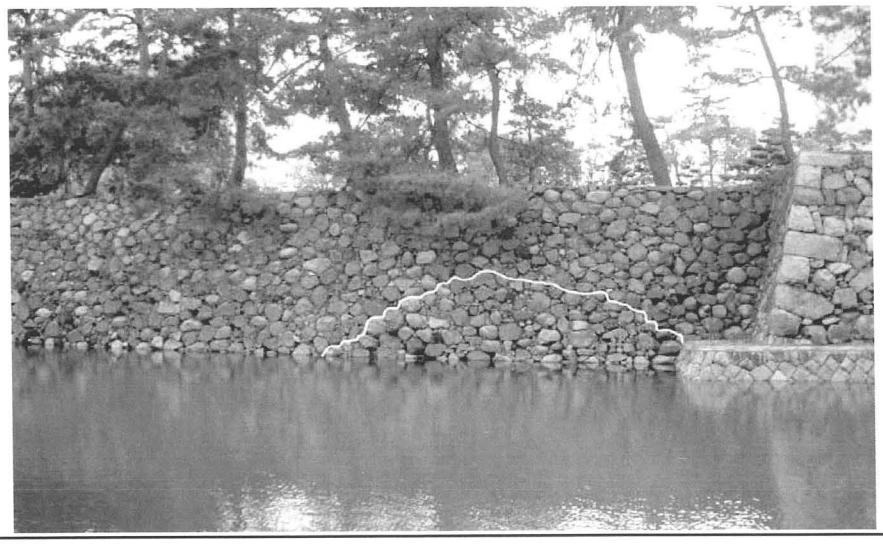
備　考		調査年月日	平成16年12月 8日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は二ノ丸東側の東面石垣で、内堀に面する。 ・高さは中央部で約6.9m、全長は天端で約43.3mである。 ・勾配は65度とかなり緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石を用いた乱積である。水際には一部凝灰岩も見られる。両隅角とも入隅である。 ・石材はやや丸みのある形状のものが多く、規模は40～50cm程度の標準的なものが多い。 ・基底部の1石を前面に持ち出すアゴ止め石が置かれ、石垣の安定を図っている。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・長大な石垣面の中央部の中段に薄いハラミが見られる。 ・水際にヌケが多く、モルタルを詰めている。
石垣の変遷	・生駒期に築造されたと考えられる。 ・下部分約1mは非常に緩い勾配で、上部の勾配と異なることから、積み直しがあった可能性がある。

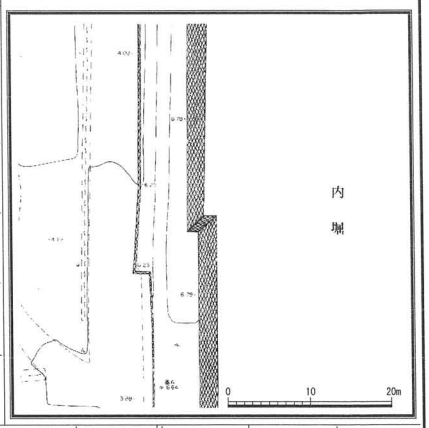
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
右隅角下部から左側へ山形の目地	上方	花崗岩	方形丸み	ほぼ同規模	野面石乱積	築造時の偶発的なもの
	下方	花崗岩	方形丸み		野面石乱積	



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	2013	地区	二ノ丸	石垣様式	積み方		野面	石垣位置
石垣部位	外(内堀に面する)				石積工法		乱積	
方　位	北				角石(算木)	左	割石、野面	
角の形状	左隅角	出				右		
	右隅角	入			その他特記			
上部構造物	塀				石材		花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印			無	

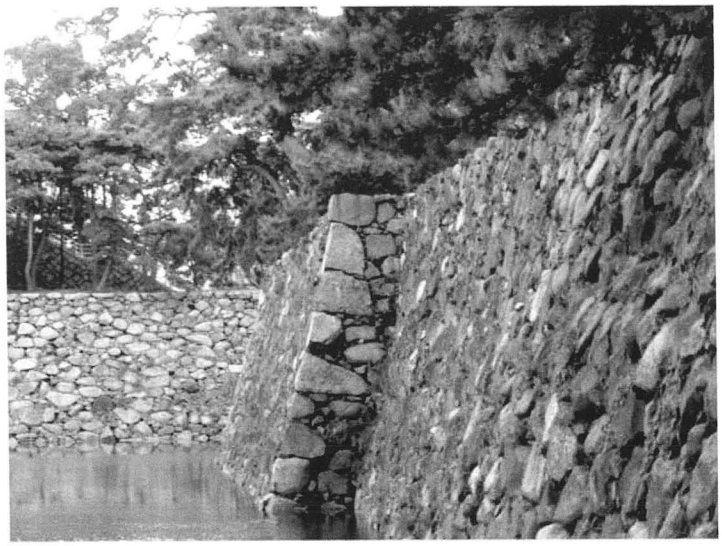


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	1.41	1.5	7.17	-	-	79	85	-	-	76

築造時期	生駒期	改修	有	基底部
修　理		文献資料		
発掘調査		その他の調査		
その他記述 1		その他記述 2		

破損現状



隅角石と隅脇石の短い石垣

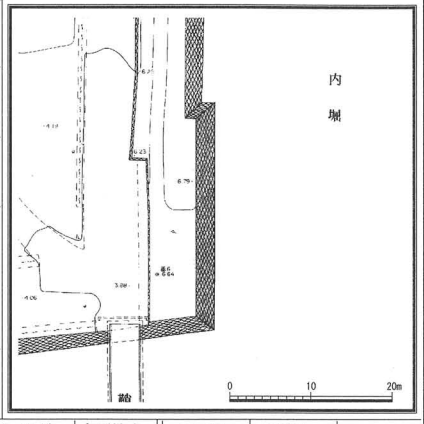
備　考	短い石垣のため中央勾配・右端勾配計測省略	調査年月日	平成16年12月 8日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は長大な二ノ丸東面の堀石垣を区切る1～2石の幅をもつ北面石垣で、内堀に面する。 ・高さは左端で約7.2m、全長は天端で約1.4mである。 ・勾配は85度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石を用いた乱積である。左隅角は割石によって積み上げられているが、下部には野面石も用いられている。右隅角は入隅である。 ・石材はやや丸みのある形状のもので、規模は標準的なものよりやや小ぶりである。特に下部に小ぶりな石材が多く見られる。 ・左隅角は完成度の低い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・隅角部石材が上部と下部で異なることから、積み直しが行われていると考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	2014	地区	二ノ丸	石垣様式	積み方		野面	石垣位置
石垣部位	外(内堀に面する)				石積工法		乱積	
方　位	東				角石(算木)	左	割石	
角の形状	左隅角	出				右	割石	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	塀				石材		花崗岩、安山岩、凝灰岩(一部)	
転用石	無			刻　印			無	

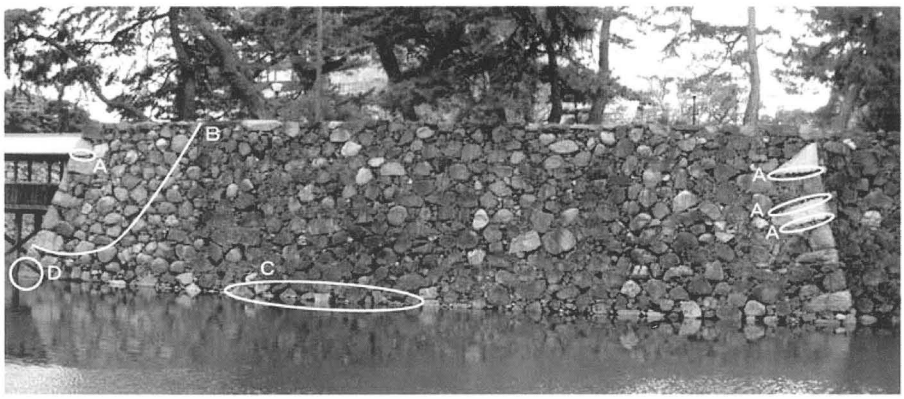


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
					s2							a2	b2	B

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
		24.65	27.5	7.82	7.45	7.68	76（上）	82(上)	80(上)	80(上)	79(上)

築造時期	生駒期	改修	基底部
修　理		文献資料	
発掘調査		その他の調査	
その他記述 1		その他記述 2	

破損現状



A．矢穴
B．目地
C．ワレ石材所々アリ（水際）
D．最下段の隅角石は野面か？

備　考		調査年月日	平成16年12月 8日

石垣項目別カルテ

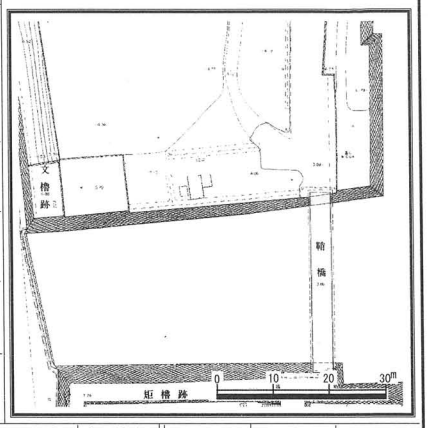
位置・規模等	・本石垣は二ノ丸南東部の東面石垣で、内堀に面する。 ・高さは中央部で約7.5m、全長は天端で約24.7mである。 ・勾配は80度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石を用いた乱積である。両隅角とも割石を用いて積み上げられている。 ・石材はやや丸みのある形状のものが多く、規模は40～50cm程度の標準的なものが多い。 ・基底部の1石を前面に持ち出すアゴ止め石が置かれ、石垣の安定を図っている。 ・左隅角は完成度の高い算木積、右隅角は完成度の低い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・石材のワレが見られるものの、石垣面は安定している。
石垣の変遷	・下部約1mは非常に緩い勾配で、上部の勾配と異なることから積み直しがあったと考えられる。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
左隅角下部から石垣天端に至る右上がりの目地	左側	花崗岩	方形丸み	ほぼ同規模	野面石乱積	左隅角部積み直し
	右側	花崗岩	方形丸み		野面石乱積	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	2015	地区	二ノ丸	石垣様式	積み方	野面、割石、切石(一部)	石垣位置
石垣部位	外(内堀に面する)				石積工法	乱積	
方　位	南				角石(算木) 左	切石	
角の形状	左隅角	出			角石(算木) 右	割石	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	文櫓、鞘橋				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印		無	

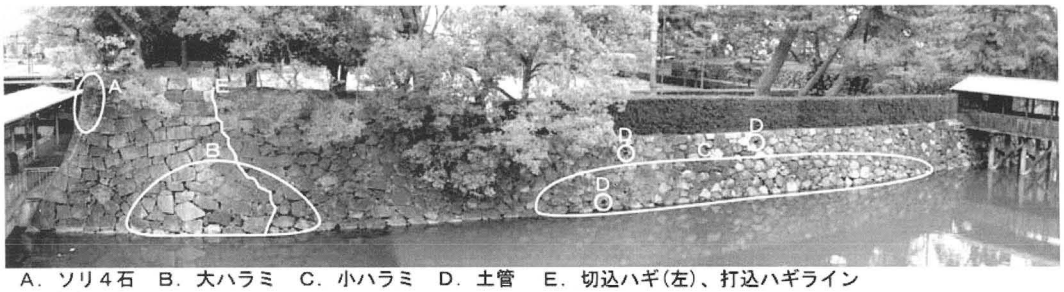


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
			s2	s23	s2				s2		有	a1	b1	A

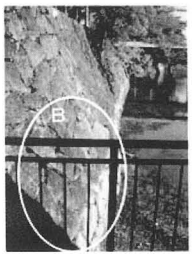
石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
		5.0/11.0/36.68/5.0	62	6.98	5.84/4.17/7.38	7.45	76	77/78	74/81	80/76	75/72

築造時期	生駒期	改修	有	基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A. ソリ4石　B. 大ハラミ　C. 小ハラミ　D. 土管　E. 切込ハギ(左)、打込ハギライン



ハラミによって切込ハギの石材の合場が空いてきて、隙間が目立つ。

備　考		調査年月日	平成16年12月 8日

石垣項目別カルテ

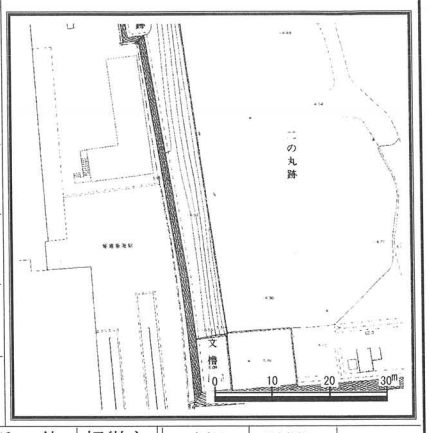
位置・規模等	・本石垣は二ノ丸南部の南面石垣で、内堀に面する。右隅角近傍で鞘橋を渡し、橋台となる。左隅角一帯では文櫓台の石垣を構成する。 ・高さは中央部で約4.2m、文櫓台部分で約5.8m、右端で約7.5mである。全長は天端で約58.6mである。 ・勾配は74～84度と変化するが、概ね平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石と割石を用いた乱積であるが、文櫓台部分は加工精度の低い切石の乱積である。右隅角は割石、左隅角は切石によって積み上げられている。 ・石材はやや丸みのある形状のものが多く、規模は40～50cm程度の標準的なものが多い。 ・基底部の1石を前面に持ち出すアゴ止め石が置かれ、石垣の安定を図っている。 ・両隅角とも完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・長大な石垣面には中段から下段にかけてハラミが見られ、左隅角付近は比較的大きい。 ・中段には石材のズレやワレが見られる。間詰石のヌケも散見される。 ・排水管を設置したため中央部で積み直しが行われている。
石垣の変遷	・両隅角を中心に積み直しが考えられる。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
左隅角下部から天端に至る左上がりの目地	左側	花崗岩	方形丸み	ほぼ同規模	野面石乱積	右隅角部積み直し
	右側	花崗岩	方形丸み		野面石乱積	
右中間に天端から下部に至る谷形目地	谷形の中	花崗岩	方形丸み	ほぼ同規模	野面石乱積	谷状部分の積み直しか築造時のもの
	谷形の外	花崗岩	方形丸み		野面石乱積	
石垣中央部に天端から下部に至る谷形目地	谷形の中	花崗岩	方形丸み	ほぼ同規模	野面石乱積	谷状部分の積み直しか築造時のもの
	谷形の外	花崗岩	方形丸み		野面石乱積	
左中間に天端から下部に至る谷形目地	谷形の中	花崗岩	方形丸み	ほぼ同規模	野面石乱積	谷状部分の積み直しか築造時のもの
	谷形の外	花崗岩	方形丸み		野面石乱積	
左隅角近くの天端から下部に至る左下がりの目地	左側	花崗岩	方形	ほぼ同規模	切石乱積	左隅角部積み直し
	右側	花崗岩	方形丸み		野面石乱積	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	2016	地区	二ノ丸	石垣様式	積み方	野面、切石(一部)	石垣位置
石垣部位	外(内堀に面する)				石積工法	乱積	
方　位	西				角石(算木) 左		
角の形状	左隅角	入			角石(算木) 右	切石	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	文櫓、塀				石材	花崗岩、安山岩	
転用石				刻　印		無	

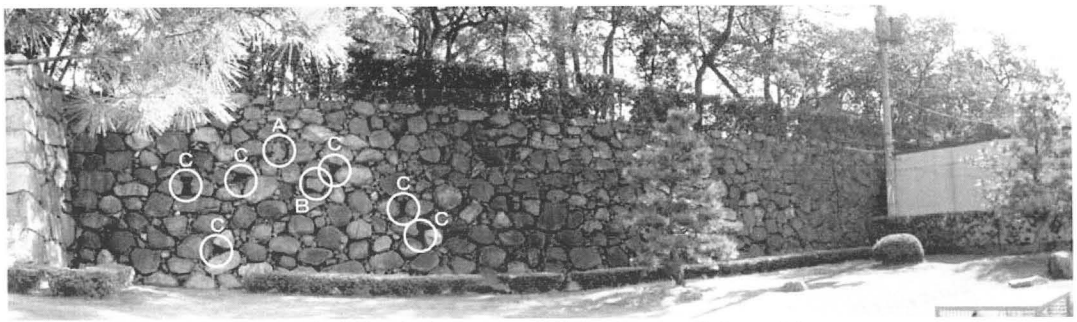


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
				s3						r5		a2	b1	B

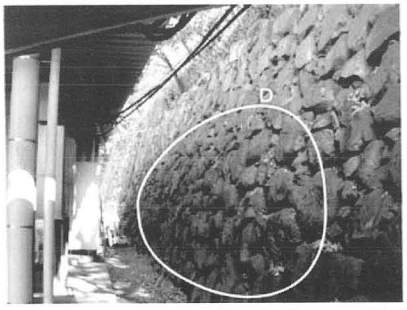
石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	52.65/9.0	63.4	4.64	4.9	4.74/5.04	90/68	82/70	81/74	75	76

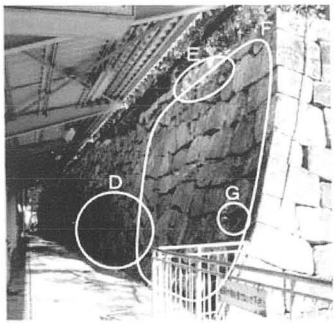
築造時期	生駒期	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．石材風化　B．礎石転用？（柱座状のくぼみ）　C．間詰石ヌケ　D．うすいハラミ
E．中央部天端付近ハラミ出し（樹木の影響？）　F．積み直し（切石）　G．くぼみ
※右の櫓台石垣（切石）は合端がきちんと合っていない。石材が動き出し？





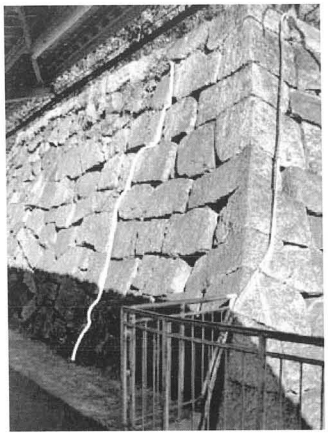
備　考		調査年月日	平成16年12月17日

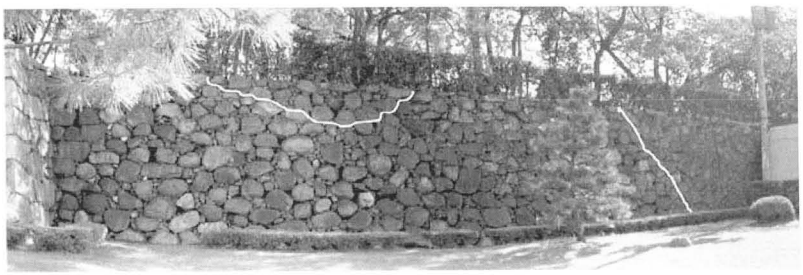
石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は二ノ丸西部の西面石垣で、南西の文櫓と北西側の弼櫓を結ぶ石垣である。内堀に面していたが埋め立てられ、現在南半分は琴電の駅舎、ホームに隣接する。 ・高さは中央部で約4.9mであるが、下部が埋め立てられており、本来はもっと高い石垣である。全長は天端で約61.7mである。 ・勾配は74～81度と変化するが、概ね平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石を用いた乱積である。右隅角は切石によって積み上げられている。左隅角は入隅である。 ・石材はやや丸みのある形状のものが多く、規模は40～50cm程度の標準的なものが多い。 ・右隅角は完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・中央部下段で薄いハラミが見られる。 ・全体的に焼損による石材の劣化が見られる。
石垣の変遷	・右隅角等に積み直しが考えられる。 ・石垣下部は後世に埋められている。

目地の状況

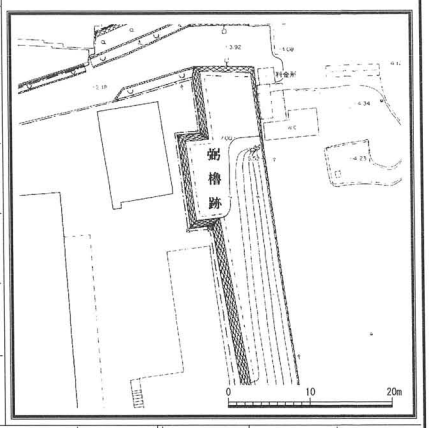
目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
左隅角部近くで上方に皿形の目地	皿形の中	花崗岩	方形丸み	ほぼ同規模	野面石乱積	皿状部分の積み直しか築造時のもの
	皿形の外	花崗岩	方形丸み		野面石乱積	
左中間の天端から下部に至る右下がりの目地	左側	花崗岩	方形丸み	ほぼ同規模	野面石乱積	築造時の偶発的なもの
	右側	花崗岩	方形丸み		野面石乱積	
右隅角部近傍の縦目地	左側	花崗岩	方形丸み	ほぼ同規模	野面石布積	隅角部積み直し
	右側	花崗岩	方形		切石布積	





史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	2017	地区	二ノ丸	石垣様式	積み方		切石	石垣位置
石垣部位	外(内堀に面する)				石積工法		布積	
方　位	南				角石(算木)	左	切石	
角の形状	左隅角	出				右		
	右隅角	入			その他特記			
上部構造物	弼櫓				石材		花崗岩、安山岩(一部)	
転用石	無			刻　印			無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好								s5			a3	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	3.13	2.88	4.72	-	4.54	73	78	83	74	68

築造時期	生駒期・松平初期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『高松城下図屏風』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

間詰石少々ヌケ

※形の揃った方形の大石を用いて丁寧に積む
切石はノミ仕上げ

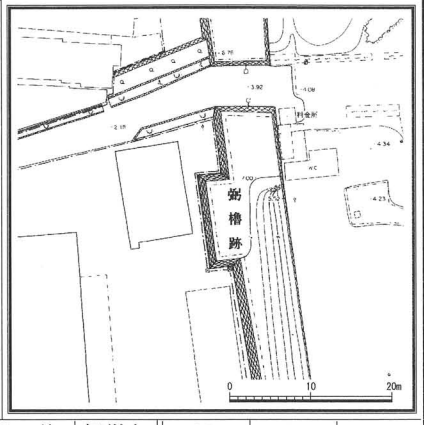
備　考	短い石垣のため中央高省略	調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は二ノ丸西部の弼櫓台南面石垣である。内堀に面していたが下部は埋め立てられ、現在緑地に面している。 ・高さは中央部で約4.7mであるが、下部は埋め立てられており、本来はもっと高い石垣である。全長は天端で約3.1mである。 ・勾配は83度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の加工精度の低い切石を用いた布積である。左隅角は切石で積み上げられている。右隅角は入隅である。 ・石材は方形の角張った形状のものが多く、規模はやや小ぶりなものが多い。 ・左隅角は完成度の低い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・№2016石垣に貼り付けた石垣であり、後出すると考えられる。 ・『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』では描かれていないが、『高松城下図屏風』に描かれており、生駒期に築造されたものか松平初期に築造されたものか不明である。 ・石垣下部は明治以降に埋められている。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	2018	地区	二ノ丸	石垣様式	積み方		切石、割石、野面	石垣位置
石垣部位	外(内堀に面する)				石積工法		布積	
方　位	西				角石(算木)	左	切石	
角の形状	左隅角	出				右	切石	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	弼櫓				石材		花崗岩、安山岩(一部)	
転用石	無			刻　印			無	

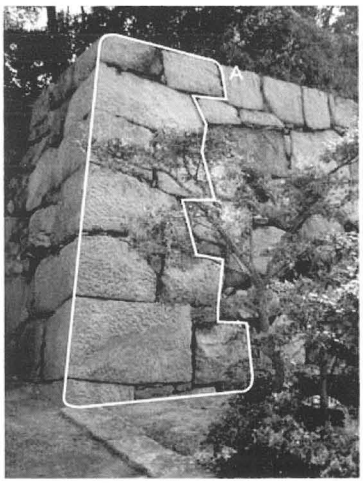


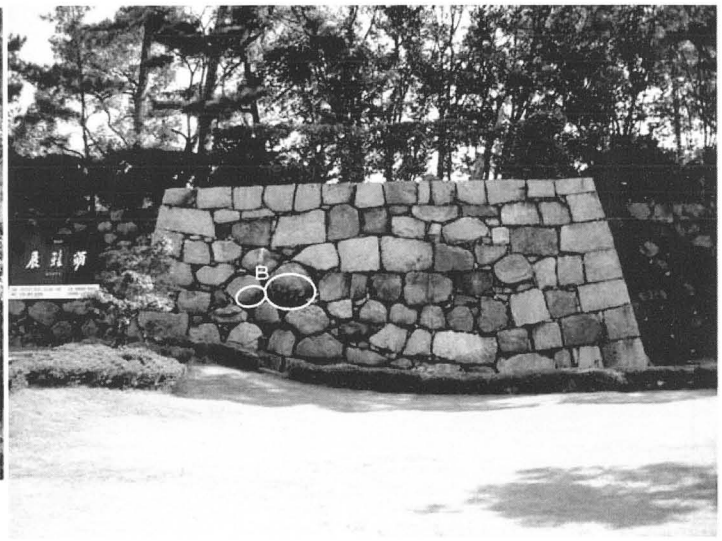
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好									r2		a3	b1	D

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
		9.71	11.44	3.81	4.56	4.66	73	78	80	78	73

築造時期	生駒期・松平初期	改修	基底部
修　理		文献資料	『高松城下図屏風』
発掘調査		その他の調査	
その他記述 1		その他記述 2	

破損現状





A．ノミ仕上げ
B．焼けた跡のような感じ

※隅角、天端付近はノミ加工した大きさの揃った切石を用いている

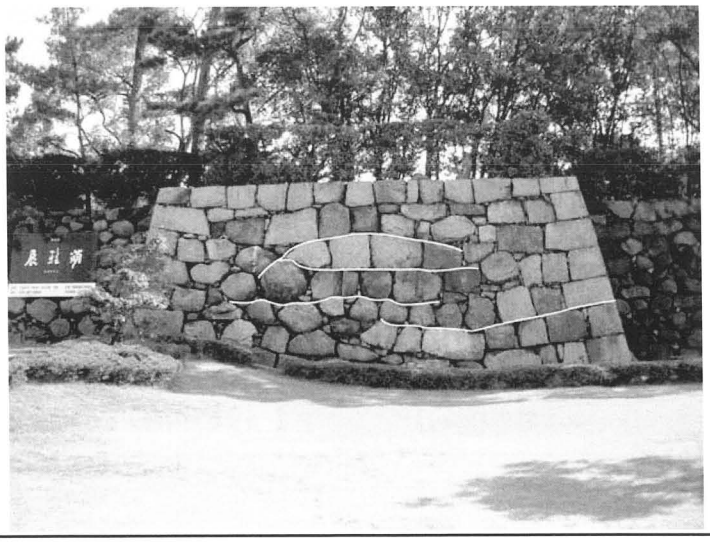
備　考		調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は二ノ丸西部の弼櫓台西面石垣である。内堀に面していたが埋め立てられ、現在緑地に面している。 ・高さは中央部で約4.6mであるが、下部は埋め立てられており、本来はもっと高い石垣である。全長は天端で約9.7mである。 ・勾配は80度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた布積が主体であるが、中央部下半では割石や野面石を用いた布積となっている。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。 ・石材は方形形状とやや丸みのある形状のものが混在し、規模は標準的なものが多いが、大小の石材も混在する。両隅角石にはノミ仕上げが全石材に見られる。 ・両隅角とも完成度の低い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』では描かれていないが、『高松城下図屏風』に描かれており、生駒期に築造されたものか松平初期に築造されたものか不明である。 ・石垣下部は後世に埋められている。

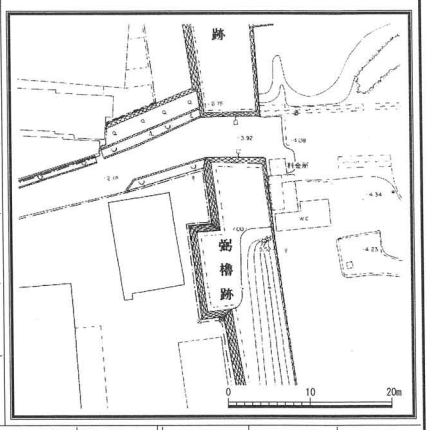
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
全体的にみられる横目地	全面	花崗岩	方形切石・一部丸み	ほぼ同規模	切石布積	布積



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	2019	地区	二ノ丸	石垣様式	積み方	割石	石垣位置
石垣部位	外(内堀に面する)				石積工法	乱積	
方　位	北				角石(算木) 左		
角の形状	左隅角	入			角石(算木) 右	切石	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	弼櫓				石材	花崗岩、安山岩(一部)	
転用石	無			刻　印		無	

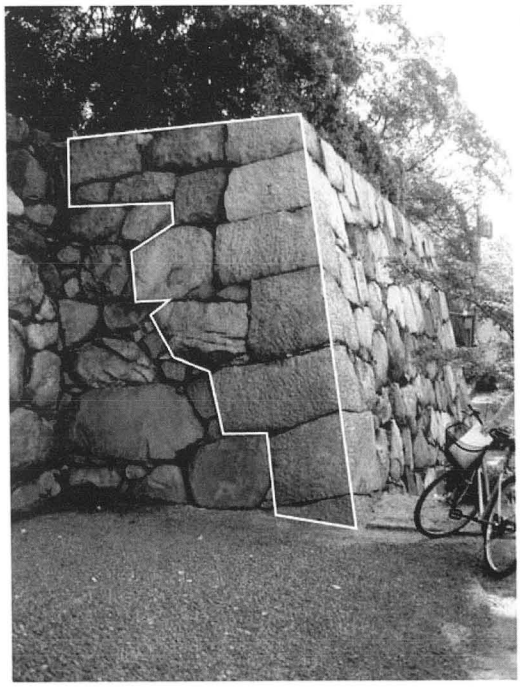


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	2.77	2.99	3.77	-	3.79	75	75	82	81	73

築造時期	生駒期・松平初期	改修	有	基底部
修　理		文献資料	『高松城下図屏風』	
発掘調査		その他の調査		
その他記述 1		その他記述 2		

破損現状



ノミ仕上げ

※切石部分はノミ跡が明瞭に認められる

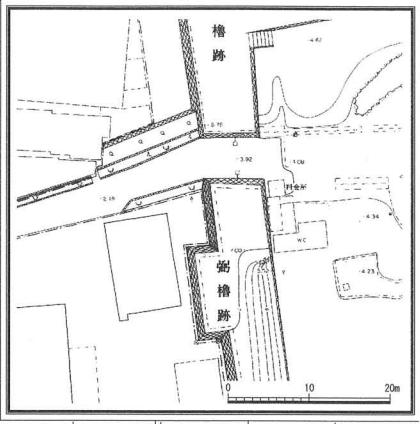
備　考	短い石垣のため中央高省略	調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は二ノ丸西部の弼櫓台北面石垣である。内堀に面していたが埋め立てられ、現在緑地に面している。 ・高さは左端で約3.8mであるが、下部は埋め立てられており、本来はもっと高い石垣である。全長は天端で約2.8mである。 ・勾配は82度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は複雑で、花崗岩の割石を用いた乱積で、右隅角部及び上段は切石を用いた布積である。左隅角は入隅である。 ・石材は方形形状とやや丸みのある形状のものが混在し、規模は標準的なものが多いが、下段や隅角で大石材も混在する。右隅角石にはノミ仕上げが全石材に見られる。 ・右隅角は完成度の低い算木積で積み上げている。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』では描かれていないが、『高松城下図屏風』に描かれており、生駒期に築造されたものか松平初期に築造されたものか不明である。 ・石垣下部は後世に埋められている。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	2020	地区	二ノ丸	石垣様式	積み方		野面	石垣位置
石垣部位	外(内堀に面する)				石積工法		乱積	
方　位	西				角石(算木)	左	切石	
角の形状	左隅角	出				右		
	右隅角	入			その他特記			
上部構造物	多聞櫓				石材		花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	

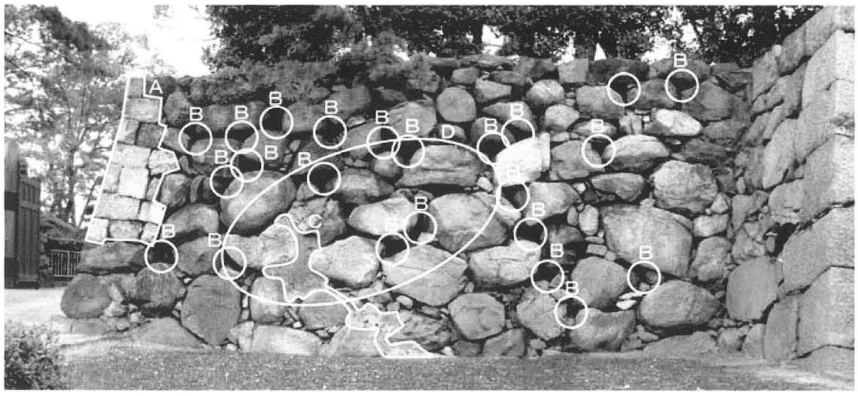


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好								s3	r2	有	a3	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	8.25	8.47	3.58	3.77	3.89	73	78	78	80	75

築造時期	生駒期	改修	有	基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．明治期以降の積み直し
B．間詰石のヌケ
C．モルタル詰め
D．焼け（剥離なし）

※石垣面揃わず。左隅角は後世の改変による開口部。

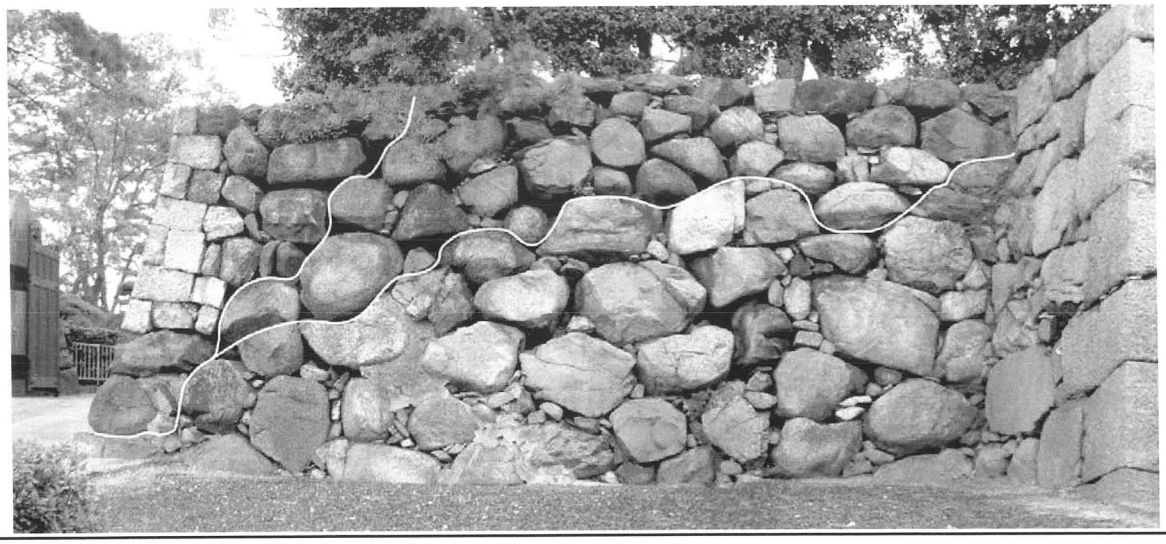
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は二ノ丸北西部の西面石垣である。内堀に面していたが埋め立てられ、現在は城郭への西の玄関口の石垣となっている。 ・高さは中央部で約3.8mであるが、下部は埋め立てられており、本来はもっと高い石垣である。全長は天端で約8.3mである。 ・勾配は78度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の野面石を用いた乱積である。左隅角の下半は野面石、上半は切石を用いて積み上げられている。右隅角は入隅である。 ・石材は丸みのある形状のものが多く、規模は大ぶりのものが多い。 ・左隅角は完成度の低い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・焼損のある石材も見られるが、石材の傷みは見られない。 ・モルタルを塗り込めた目地も部分的に見られる。
石垣の変遷	・左隅角は明治以降に開口部拡張のため積み直されている。

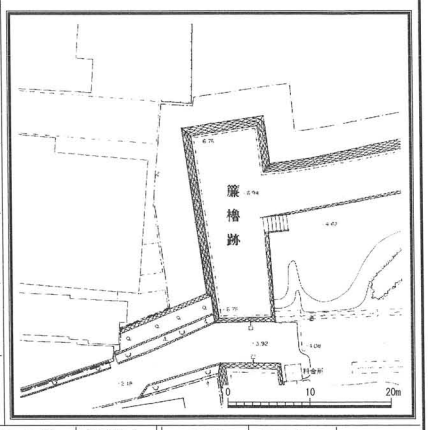
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
左隅角下部から天端に至る右上がりの目地	左側	花崗岩	丸み	左側がやや小ぶり	野面石乱積	隅角部積み直し
	右側	花崗岩	丸み		野面石乱積	
左隅角下部から右隅角上部に至る右上がりの目地	上方	花崗岩	丸み	上方側が小ぶり	野面石乱積	上方石垣積み直し
	下方	花崗岩	丸み		野面石乱積	



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	2021	地区	二ノ丸	石垣様式	積み方		野面	石垣位置
石垣部位	外(海に面する)				石積工法		乱積	
方　位	西				角石(算木)	左	野面、割石	
角の形状	左隅角	出				右	切石	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	簾櫓、多聞櫓				石材		花崗岩、安山岩(一部)	
転用石	無			刻　印			無	

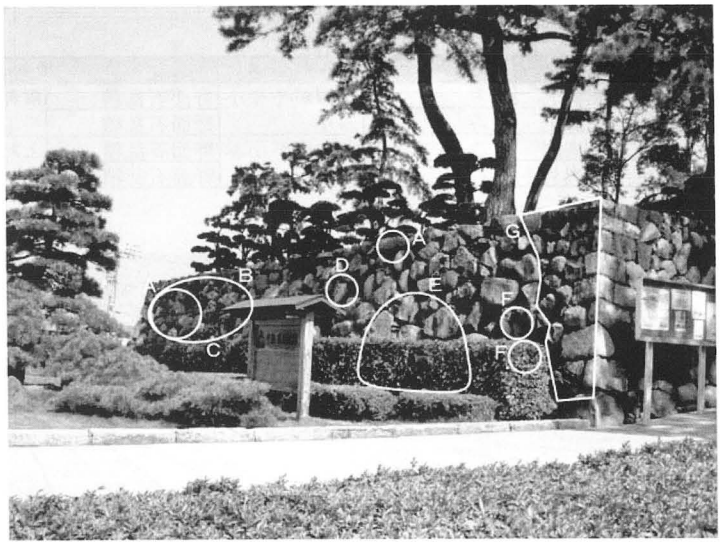


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
			s2	s3		n23			s2	r5		a2	b1	B

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
		22.83	24.24	4.59	3.97	3.54	70	84	74	79	74

築造時期	生駒期	改修	有	基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．焼損
B．ワレ落ち
C．間詰石ヌケ
D．ズレ
E．ハラミ
F．焼けて欠け
G．積み直しライン

※右隅角は後世の改変による開口部。全体に焼損による石材劣化、間詰石のヌケが目立つ。

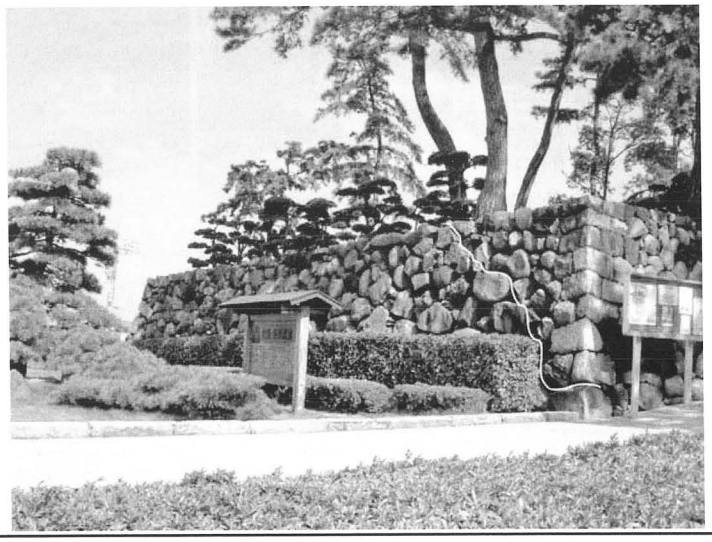
備　考		調査年月日	平成16年11月 8日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は二ノ丸北西部の西面石垣である。海に面していたが、埋め立てられており現在は高松城跡の西の玄関口に位置する石垣である。 ・高さは左端で約4.6mであるが、下部は埋められており、本来はもっと高い石垣である。全長は天端で約22.9mである。 ・勾配は中央部で74度とやや緩やかであるが、右端で79度、左端で84度とばらつきが見られる。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の野面石を用いた乱積である。右隅角は切石、左隅角は野面石と割石を用いて積み上げられている。 ・石材は丸みのある形状のものが多く、規模は大小混在する。 ・両隅角とも完成度の低い算木積である。 ・石垣面は乱積特有の凹凸が見られるが、築石のズレなどにより、その程度は大きい。 ・天端は不揃いである。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・右隅角近くで薄いハラミが見られる他、中央部で数石のズレが見られる。石材がワレ落ちているものや、間詰石のヌケが隅角近くで見られるが、石垣全体の崩落を引き起こす破損にまでは至っていない。 ・石垣面全体が戦災による焼損を受けており、石材の劣化が見られる。全体に茶褐色に変色している。
石垣の変遷	・右隅角は明治以降に開口部拡張のため積み直されている。

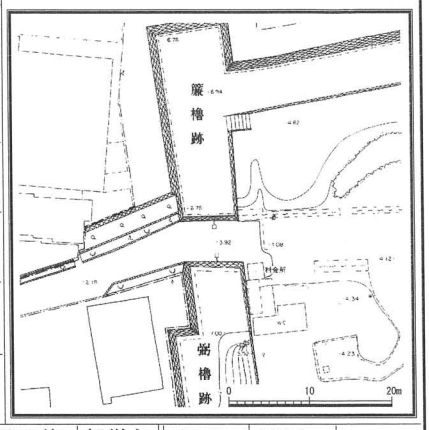
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
右隅角下部から天端に至る左上がりの目地	左側	花崗岩	丸み	右側自然石が小ぶり	野面石乱積	隅角部積み直し
	右側	花崗岩	丸み		野面石乱積	



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	2022	地区	二ノ丸	石垣様式	積み方		野面、割石	石垣位置
石垣部位	門				石積工法		谷積	
方　位	南				角石(算木)	左	切石	
角の形状	左隅角	出				右	切石	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	門(刎橋口)				石材		花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印			無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b1	D

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
		6.51	(7.0)7.65	3.5	3.07	3.03	74	78	80	81	74

築造時期	松平初期・新郭造築期	改修	有	基底部
修　理		文献資料	『小神野夜話』	
発掘調査		その他の調査		
その他記述 1		その他記述 2		

破損現状

A．ヌケ
B．モルタル詰め
※明治以降の開口部。両端は布積、中央は谷積。

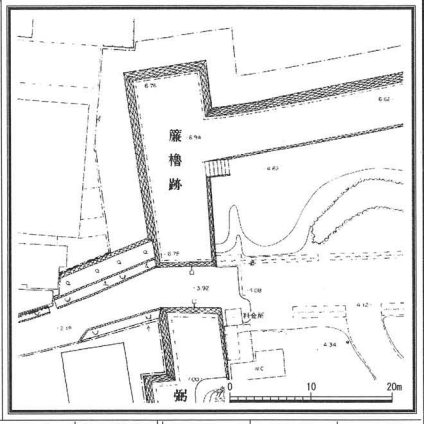
備　考		調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は二ノ丸西部の開口部の南面石垣で、現在城郭への西の玄関口に面する石垣である。 ・高さは中央部で約3.1m、全長は天端で約6.5mである。 ・勾配は80度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石を用いた谷積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。 ・石材は丸みのある形状のものが多く、規模は標準的なものや、やや小ぶりのものが多い。 ・両隅角とも完成度の低い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『小神野夜話』等によると、松平初期から新郭造築期にかけての記述に、新たに開口した門とされている。 ・現在の石垣は明治以降に開口部を拡張したものと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	2023	地区	二ノ丸	石垣様式	積み方	野面	石垣位置
石垣部位	内(櫓台)				石積工法	乱積	
方　位	東				角石(算木) 左	切石	
角の形状	左隅角	出			角石(算木) 右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	多聞櫓				石材	花崗岩、安山岩(一部)	
転用石	無			刻　印		無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好	s1										a3	b1	D

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
		10.4	10.09	2.82	2.19	2.06	74	78	83	80	73

築造時期	生駒期	改修	有	基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

A．明治期以降の積み直し
B．天端石ヌケ

※間詰石はほとんどが平石にかみ合わず浮いた状態。
後から詰め込んだものか。

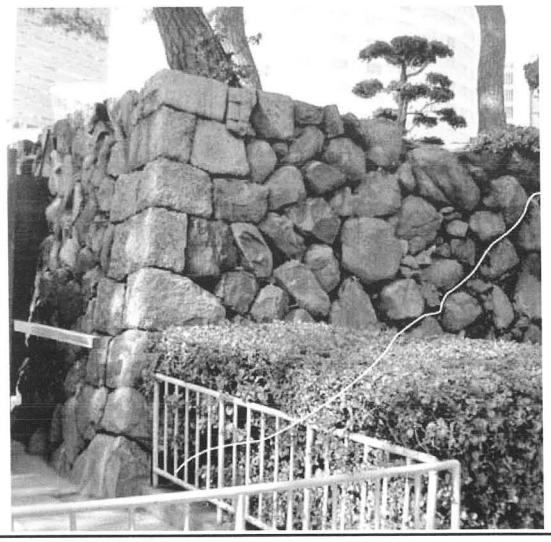
備　考		調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は二ノ丸北西部の多聞櫓台の東面内石垣である。西の玄関口の裏側の石垣となっている。 ・高さは中央部で約2.2m、全長は天端で約10.4mである。 ・勾配は83度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の野面石を用いた乱積であるが、左隅角近傍は谷積が見られる。左隅角は切石を用いて積み上げられている。右隅角は入隅である。 ・石材は丸みのある形状のものが多く、規模は標準的なものが多いが、小石材も比較的多く見られる。 ・左隅角は完成度の低い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・天端石に欠損が見られるが、概ね良好な状態である。
石垣の変遷	・左隅角は明治以降の開口部拡張に伴い積み直されたと考えられる。

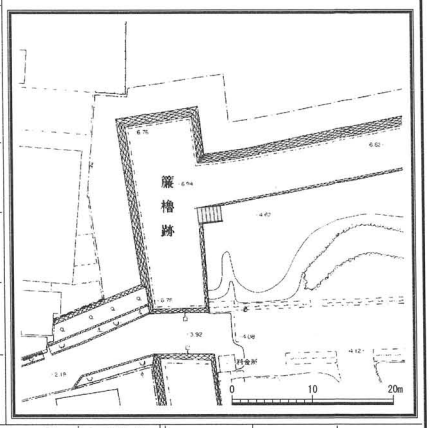
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
左隅角下部から右上がりに天端に至る目地	左側	花崗岩	方形丸み	左側割石が小ぶり	野面石谷積	隅角部積み直し
	右側	花崗岩	方形丸み		野面石乱積	



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	2024	地区	二ノ丸	石垣様式	積み方	野面	石垣位置
石垣部位	雁木				石積工法		
方　位	東				角石（算木）左		
角の形状	左隅角	出			角石（算木）右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	－				石材	花崗岩、凝灰岩（一部）	
転用石	無			刻　印		無	

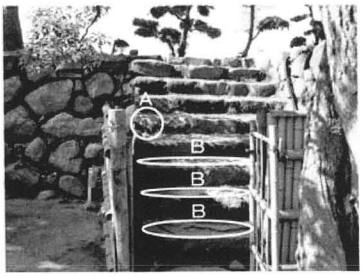


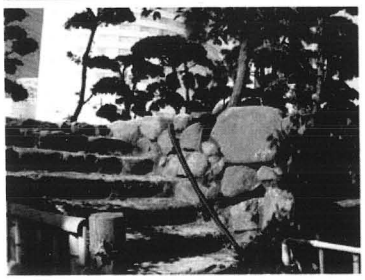
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好									r2	有	a3	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	1.87	－	－	－	－	73	85	－	－	－

築造時期	不明	改修		基底部	
修　理		文献資料	『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状





A．石材劣化
B．目地モルタル
※踏面は板石状の凝灰岩で劣化がみられる
側面積石は野面石で間詰石所々ヌケ

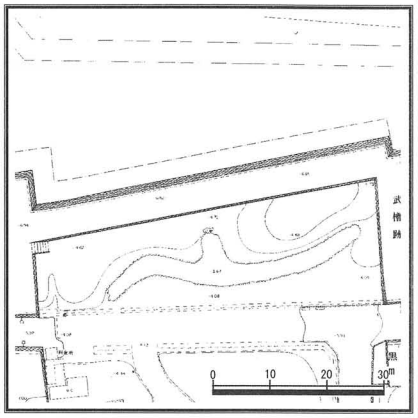
備　考	雁木10段	調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は二ノ丸北西部の簾櫓台へ上る雁木である。 ・上端での幅員は約1.9mである。
積み方石材等	・花崗岩の割石を用いている。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・石材の劣化が見られる。 ・目地には全面モルタルを詰める。
石垣の変遷	・築造年代は不明であるが、『旧高松御城全図』に描かれており、明治以降のものではない。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	2025	地区	二ノ丸	石垣様式	積み方	野面	石垣位置
石垣部位	内(多聞櫓台)				石積工法	乱積、谷積(一部)	
方　位	南				角石(算木) 左		
角の形状	左隅角	入			角石(算木) 右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	多聞櫓				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印		無	

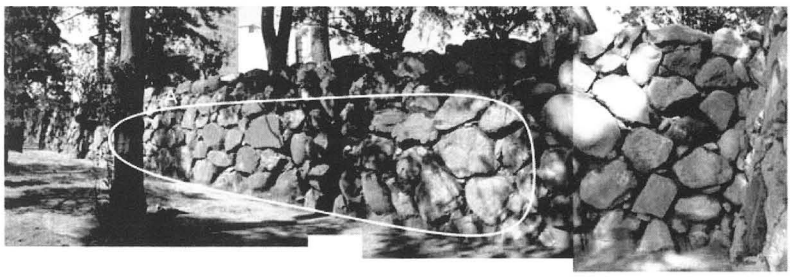


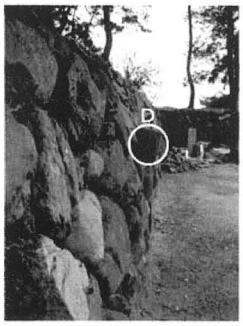
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
		s1	s2t2	s23					s2			a1	b2	B

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	60.22	56.75	0.26	2.14	2.25	-	86	78	80	78

築造時期	生駒期	改修	有	基底部	
修　理		文献資料	『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状





A．石垣面凸凹
B．天端石が波打つ（左側は欠損もあり）
C．小ハラミ
D．ズレ

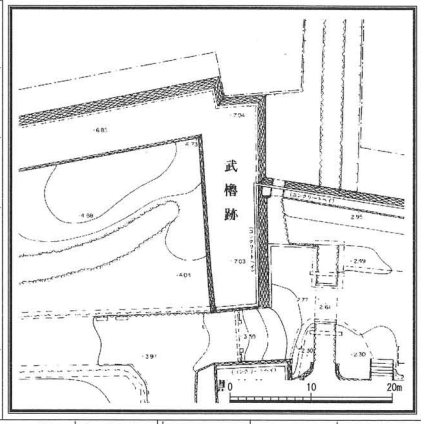
※右寄りのズレ出した石材は落下のおそれあり

備　考	左角勾配雁木により計測不可	調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は二ノ丸北部の廉櫓台と武櫓台をつなぐ多聞櫓台の南面内石垣である。 ・高さは中央部で約2.1m、全長は天端で約60.2mである。 ・勾配は78度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石を用いた乱積である。部分的に割石による谷積が見られる。両隅角とも入隅である。 ・石材は丸みのある形状のものが多く、規模は標準的なものが多い。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・石垣中央部の中段で築石のズレ出しが見られる。 ・天端石の欠損や中段から下段にかけて薄いハラミが見られる。
石垣の変遷	・『旧高松御城全図』には石垣中央やや西寄りに雁木が描かれているが、現在雁木は存在しておらず積み直しがあったことを示唆する。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	2026	地区	二ノ丸	石垣様式	積み方	野面、割石	石垣位置
石垣部位	内(櫓台)				石積工法	乱積、谷積(一部)	
方　位	西				角石(算木) 左		
角の形状	左隅角	入			角石(算木) 右	割石	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	武櫓、鉄門				石材	安山岩、花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	

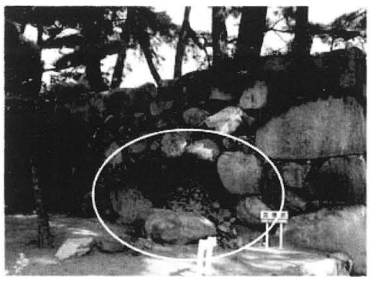
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
			t2	t2				t123		r5		a1	b1	A

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	21.95	21.55	2.26	2.81	解体	78	83	80	解体	86

築造時期	生駒期	改修	有	基底部	地山、礫敷き
修　理	平成16・17年度解体修理 『鉄門石垣調査・整備工事報告書』	文献資料	『英公外記』『旧高松御城全図』		
発掘調査	『鉄門石垣調査・整備工事報告書』	その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

A．谷積
B．ハラミ
C．マツの根が押し出し崩落



崩壊部（平成16年度解体積み直し）

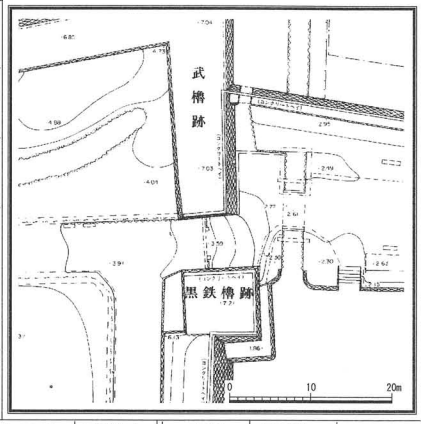
備　考	右端勾配解体	調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は二ノ丸北東部の武櫓台及び鉄門の西面内石垣である。 ・高さは中央部で約2.8m、全長は天端で約22mである。 ・勾配は80度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は安山岩、花崗岩の野面石を用いた乱積であるが、左隅角に割石による谷積が見られる。右隅角は割石によって積み上げられている。左隅角は入隅である。 ・石材は丸みのある形状のものが多く、規模は標準的なものが多い。 ・右隅角は完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・石垣中央部から右側にハラミが見られる。 ・平成15年10月25日に松の根によりき損。 ・平成16・17年度の解体修理では石垣中央部のハラミまでは修理していない。
石垣の変遷	・発掘調査により17世紀中葉以降に少なくとも1回以上の積み直しがあったことが判明。 ・左隅角部の谷積部分は、『旧高松御城全図』によると雁木が描かれている。谷積の部分は長い石材が多く、雁木の石材を再利用して積み直したと考えられる。 ・平成16・17年度に右隅角近傍を解体修理。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	2027	地区	二ノ丸	石垣様式	積み方		野面	石垣位置
石垣部位	門				石積工法		乱積	
方　位	南				角石(算木)	左	割石	
角の形状	左隅角	出				右	割石	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	鉄門				石材		花崗岩、安山岩(一部)	
転用石	加工石				刻　印		無	

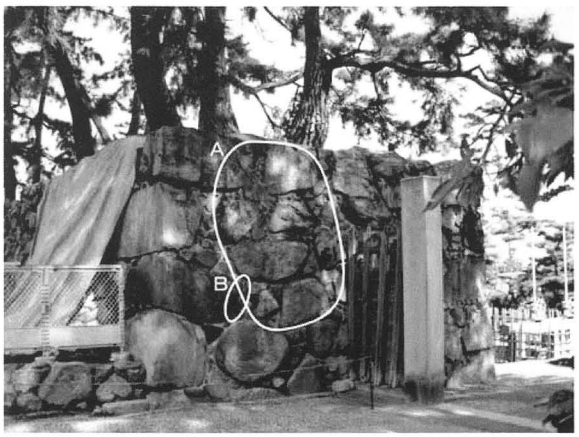


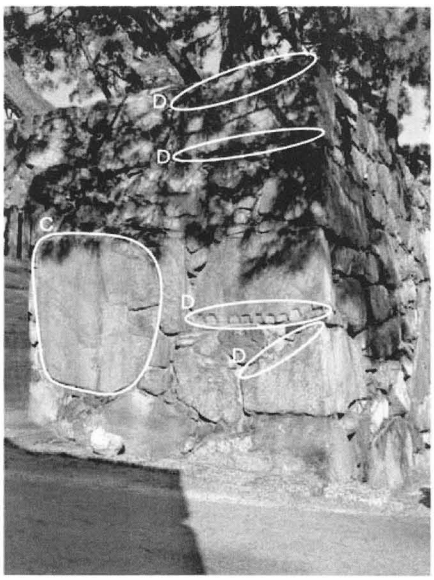
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好				n2					r5	有	a3	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	6.5	6.85	3.55	3.75	4.03	86	90	89	85	83

築造時期	生駒期	改修	有　基底部
修　理	平成16・17年度解体修理(全面) 『鉄門石垣調査・整備工事報告書』	文献資料	『英公外記』
発掘調査	『鉄門石垣調査・整備工事報告書』	その他の調査	
その他記述 1		その他記述 2	

破損現状





A．焼損
B．ワレ
C．大石（縦165cm、横150cm）
D．矢穴
※全面目地モルタル詰め

※門石垣で大石を用いて積む

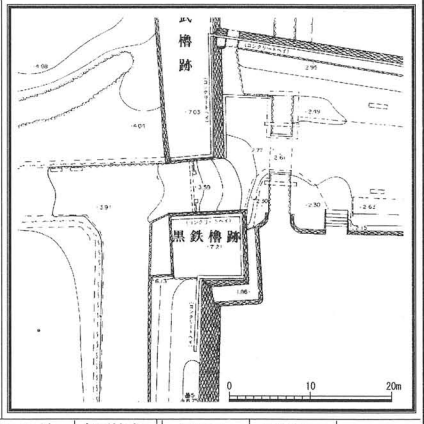
備　考		調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は二ノ丸北東部の鉄門の南面内石垣である。 ・高さは中央部で約3.7m、全長は天端で約6.5mである。 ・勾配は85～90度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の野面石を用いた乱積である。両隅角とも割石で積み上げられているが、最下段は野面石である。 ・石材は丸みのある形状のものが多く、規模は標準的なものが多いが大石材も見られる。 ・両隅角とも完成度の高い算木積である。 ・鏡石右側石材は雁木状の加工が施された石材を転用していることが解体修理で判明した。 ・刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・全体にハラミが見られ、目地全面にモルタルが詰め込まれていたが、平成16・17年度に解体修理を実施した。
石垣の変遷	・発掘調査により17世紀中葉以降に少なくとも1回以上の積み直しがあったことが判明。 ・平成16・17年度に地上部分は全面を解体修理。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	2028	地区	二ノ丸	石垣様式	積み方	野面、割石	石垣位置
石垣部位	門				石積工法	乱積、谷積(一部)	
方　位	北				角石(算木) 左	切石	
角の形状	左隅角	出			角石(算木) 右	切石	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	黒櫓、鉄門				石材	花崗岩、安山岩(一部)	
転用石	無			刻　印		無	

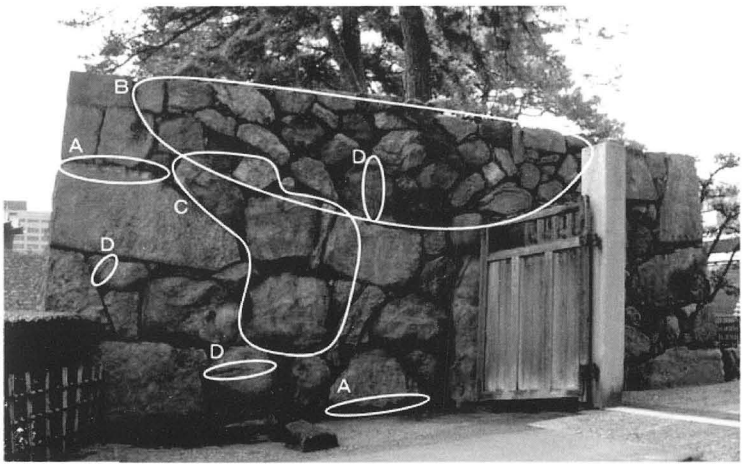


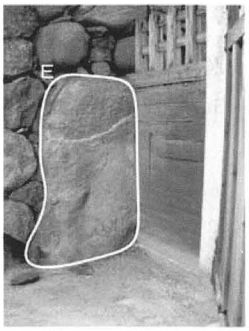
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好				n3					r5		a3	b1	D

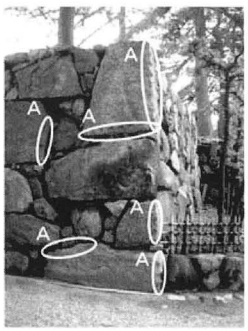
石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	7.68	9.89	4.04	3.71	3.61	82	85	86	85	81

築造時期	生駒期・松平初期	改修	有	基底部	
修　理		文献資料	『高松城下図屏風』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状







A．矢穴
B．谷積
C．焼け
D．ワレ
E．大石（縦190cm×横160cm）

※門石垣で大石を用いて積む。一部新しい石材が見られる。

備　考		調査年月日	平成16年12月17日